

第6回 蘇東坡はデビューアルバムを渋く語った

——細やかに物の理を思つて坐るそてに歎息たんそくする

2016年10月19日（水）。

今年は9月になったあたりから雨が多く、秋晴れといえるような日がほとんどないままに10月も半ばに至り、ここにきてようやく澄んだ青空が見られようになった。この日はとくに快晴で、気温がかなり上がった。

午後3時ちようどに現れたイノ君に、

「波はどうでした？ この上天気です、サーフィンに行ったのでしょう？」

「天気がよすぎてさあ、お子ちやまの水遊びにもならなかったよ」

「それは残念でしたねえ」

「で、どっちだと思う？ あると思う、ないと思う？」

「ん？ つまり、波はなかったんですよね」

「叔父さん的には、やっぱ、ないほうがいいんだろうね」

「何のことですか？」

「決まってるじゃん、これだよ、これ！ 今日には期待に反してあるんだよなあ」

イノ君はICレコーダーを取り出した。

「ああ、そのことですか」

「がっかりした？ この前はなかったんで、ほっとしてたよね。今日は持つてきつちやったんだよねえ」

イノ君は2週間ほど前にもきて、そのときにはICレコーダーはなかった。確

かに私はほっとしたのだった。〇〇に行くお金はそう簡単には貯まらないのだろうと安堵したのをイノ君に見破られた。

「いや、嬉しいですよ。そろそろ次のがこないと、手があいちやうなあって思っていたところですよ」

「ホント？ ウソっぽいなあ。大変だつてぼやいてなかったっけ」

「そんなことないですよ。余裕ぶつちぎりですよ」

「だったら、ちょうどいいね。今回もトバー君はたっぷりしやべつてんから、うんと仕事ができると思うよ」

「それは楽しみです」

「へーえ、そう、よかった、よかった。それで、この分がああなチャチなホームページに載るまでにはどれくらいかかる？ この前の分が、余裕でまだだよね」

「まだだつてことは、ホームページを見たりしてくれているんですか？」

「二応はね。だつて、叔父さんがもしもへんなことしてたら、トバー君に悪いからね」

「へんなことつて、何ですか？」

「ここは原詩とは違うから、ちよつと直しておこうとかつて。叔父さんはそれなりに知識があるみたいだからさ」

「原詩に忠実になんて思ったら、たぶん全部を直さないとならないですよ。大変な超訳ですから」

「トバー君がしゃべったのはそのままにしておいてほしいけど、ボクがくつちやべつてんのは、どんどん省いてくれちゃって構わないからね。つていうか、ボクがばあばあテキトーなことを言つてんのが、そのままになつてんのが、びつく

り栗まんじゅうなんですけどお。まるつきりジャマだよね」

「そんなことないでしょう。イノ君のおかげでほどよく話が飛ぶんで、それがかえっていいのではないのでしょうか」

「話の腰を折ってんだだけだよ。バカ丸出しの発言でさ。叔父さんとしても恥ずかしいでしょ、こんなトンチキな姪がいたんでは。テキトーに消しといてよ」

「テキトーって言われても、苦手なんですよ。あたしってこだわりの人じゃないですか？」

「それはボクのセリフ！ B型人間は外見さえよければOKの超テキトーなくせして。ボクとしては、能なしバカはヘソを隠すで、出しゃばりたくないんで、今回こそは黙ってうなずくだけにしようと思ってただけど、酒呑んでんから、抑制がきかないんだよなあ、つい口をはさんじゃったんだけど」

「ちよつと聞きたいのですが、トーバー君の話って、イノ君としてはどうなんですかねえ？」

「どうなんですかって、おもしろいか、つまらないかってこと？」

「だって、漢文の授業は寝てばかりで、わたしが中国の話をして一度も聞こうとしたことのないイノ君ですからねえ」

「いまだって漢文も中国も100パー興味ないのは変わらないけど、トーバー君の話なら聞きたい気がするよ。なんかしんないけど、ちよつとだけ心が広く大きくなるような感じがするんだよなあ。酔ってる効果もあるんだろうけどさ。職場とかでいろいろあっても、チマチマつままないことを思ったりするのはやめようって、そんな気になったりするんだ」

「そうなんですかねえ。それと、もう一つ聞きたいんですけど、例の袋作戦はう

まく行ってるのですか？ ○○に行っただってことは、そうだってことですよね」

「まあまあかな。職員待遇が画的によくなれば、毎週だって行けたりするんだろけれど、国は介護保険をケチることしか言わないから、2カ月に1回くらいがいいところかもね。長続きするようにって思うとね」

「堅実ですね」

「もちろん、堅実ケンちゃんだよ。○○は好きな場所なんで、心置きなく使えるお金を用意して行こうっていうのが袋作戦だからね。○○のおかげでボクはずいぶん変わったと思うよ。あそこでの経験がなかったら、いまの職場だつてとつくに辞めていたかもね。いくら叔父さんがらみをきかせていてもダメかも」

「わたしは別ににらみなんかきかせていませんけど。もう一つと聞くとですね、○○でトバー君とどうやって会っているのですか？」

「ふつうに会ってただけだよ。ボクが店に行って、いつもの決まったところにすわるよね、するとそのうちトバー君がやってきて、『じゃ、まずはいつものライチサワー』って、そんな感じだけだ」

「待ち合わせの日付とか時間とか、浜で会ったときにでも約束しているのですか？」

「そんなことしない。トバー君はスマホもガラケーもないから事前の連絡はなし。ゼロかけるゼロはゼロっていうくらいに何もなしだよ」

「それでよくうまく会えますね」

「ボクが〇〇に行くよね、『いつもどこかあいてる？』って店長に聞いて、もしもあいてなければ、『じゃあ、またこんど』って帰っちゃうんだ。こだわりの人だからさ、いつもんどこかあいてるときだけ入るんだよ。入って5分もたたないうち

にトバー君はやってくる。それだけのこと。ゼロたすゼロはゼロっていうくらいに「くふつうでしょ」

「もしかしたら、トバー君は頻繁に〇〇をのぞきにきているってことですか？
それとも、ストーカーですかねえ」

「どっちもない。ゼロわるゼロは無限大っていうくらいにありえない」

「もう一つと聞くとですね」

「今日はやけにいろいろ聞いてくるね。しつこいときらわれるよ」

「トバー君が〇〇にちょうどよく現れるメカニズムは不明のままとしても、
にもかかわらずもやってくる動機は何なのでしょう？ その点についてイノ君はど
のように考えているのですか？」

「とくに考えてなんかいないけど。だれかをつかまえて話をしたいってことなん

だろうと思うよ。たまたまボクがつかまったんだらうね。ほら、友人が苦悩すれば自分も苦悩するみたいなことを言ってたでしょ。ボクはなにしろ苦悩の人だから」

「そんなふうには見えませんけど」

「叔父さんにはわからなくても、トバー君ほどの人になるとわかるってことだよ」

* * *

今晩は都に着いて、その後、初めての仕事に就いたあたりまでをお話したいと思っっています。例によって横道にそれて、思うように進まなかったりするかもしれません。

——今日は、ボクはあんまし口をはさまないって決めてきたんだ。だから、サクサクと進められると思うよ。

㊦ 都に着いたのは嘉祐5（1060）年2月半ばでした。諸方面に挨拶してまわ

り、とりあえず比較的安手のところを借りて一家の仮の住まいとしました。我が父は自分の才能を活かせる仕事を都で必ず得る気でいましたし、私たち兄弟は官僚としてすぐに働く気でしたから、故郷の眉山びざん県を出たときに用意したお金の多くが旅の間に消えてしまってもお財布の方の辻褄は合うと考えていました。実際に、5月には、科擧合格者の常として地方の中くらいの町の町長補佐のような仕事は私と弟に割り振られ、それを受けていれば何も問題はなかったのです。とこ

ろが、思いがけずまた試験を受けるといふ話が持ち上がって私たち兄弟は受験勉強に取り組むことになり、父は父で気位が高く、自分に見合った仕事でなければと選り好みをしたために、一家には決まった収入のない状態がしばらく続くことになってしまいました。

——試験って、なんの試験？ 無収入で暮らしたんだ。例の袋作戦発動はもつと後だよ。あつ、いっけねえ。もう口をはさんじゃったじゃんかよお。

㊦ 父はもともとは商人でありましたから、本来なら経済的センスがあつてしかるべきなのでしょうけれど、不正直であることを嫌い、小さな利をちまちま求めることを嫌い、まっとうにして大いに利益のあるような夢のようなことを追って

放浪の旅を繰り返していました。不思議な人で、商人らしく人当たりがいいところと、譲れぬとなったら一步も譲らぬ不遜で傲慢なところがあって、それでいて妙に人に好かれ、無一文で旅をしても必ずどこかに世話してくれる人がいました。都に着いてしばらくすると、父は旧友のところ起居候をし、私たち兄弟はさらに安いところに移って受験勉強に専念するようになりました。

8月になって、父としてもこれくらいで妥協すべきと思ったのでしよう、ひしよしょうしこうしょう秘書省試校書郎という職を受けました。文字面からなんとなく推測できるように、宮廷図書館の文書を整理して、国家にとって有益な資料を作成するというような仕事です。父の学識が活かせ、適職であったのですが、国政の機微に関わることのない地味な職で、父としてはかなり不満がありました。それでも、科擧の合格者でもないのに、知人たちが奔走してくれたお蔭でこの職に就けたのですから、

大いに感謝しなければいけなかったのです。

私は父よりもさらに経済的センスがなく、家計のやりくりはすべて弟に任せっきりでした。弟は冷静に状況を分析し、的確な判断を下すことに長じていて、緻密な計算も得意でしたから、商人として家業を継いでいてもきつと成功したでしょう。その才能は母親譲りであったように思います。母は父が不在の間も、父が学問に打ち込むようになってからも、家の経済を一人で切り盛りしていました。

最初のうちは実家に助けてもらったこともあったようですが、いつしかツボを心得て、家業の商売を守り、農地の管理もきちんとして、眉山びやん県を出るに際して財産を整理してわかったのは、もともとあったものよりも母はかなり大きく増やしていたのでした。

受験勉強は1年半に及び、諸事物価が高い都では、弟がいくら儉約に努めても

減る一方ではだんだんに厳しさを増し、終わりのころには、ふだん食べるものと
いったら「三百」のみさんばくということになったのでした。

ちなみに、父が職を得たのだから一家はそれで十分に暮らせたのではと思われ
るでしょうけれど、父の俸給はわずかなもので、それを父らしく無頓着に使って
しまうので、私たち兄弟は手持ちのものでやりくりしなければならなかったので
した。

「三百」とは何だと思えますか。「三百」は三つの白、来る日も来る日も三つの
白いものだけを食べたのです。世には八種類のご馳走はっちゃんがあるとされ、「八珍」と言
います。この店ではあなたのおかげで「八珍」のなかまに入れていいものばかり
を頂戴しておりますが、「三百」もなかなか味わい深いものです。

——お金がないんだから、安いものだよね。安くて白いものというと、たとえば豆腐とか？ 豆腐ってたしか中国からきたものだよね。どう、冷奴でも注文しておく？

ト 豆腐なら大変なご馳走です。答えを言うと、白米と塩と大根です。

——それなら三つとも白いや。でも、大根と塩だけじゃ栄養不足で、頭が働かなくなるんじゃないの？ 受験生の食べるものといったら、やっぱカツとかキツトカットとかコアラのマーチでしょうに。

ト ずっと後になって、ある友人に「三白」のことを話したら、「そんなも

のでは」と、まったく信じられないという顔をしたので、ちよつといたずら心が湧いて、次に会ったときに、こんど「ぜいはん糞飯」をこ馳走したいからと、我が家に誘いました。「糞」という字は二つの毛から成り、毛織物を意味します。毛織物の飯とは何だろうかと、友人は首をひねりながらやってきました。私は茶の一杯も菓子の一つも出さずに、いつもにも増してよくしゃべり、昼を過ぎて友人の腹がぐうぐう鳴つても知らん顔、しゃべってしゃべってしゃべりまくり、ついには日が傾き、友人は空腹のせいでぐったりし、何を聞いても上の空となつたので、

「ではそろそろ『糞飯』といたしましうか。自慢するわけではありませんが、これより美味なるものはなかなかありますまい」

友人の顔がぱつと輝き、早速、その前に三つの椀を並べますと、ごくりと生唾を飲み込んで飛びついて蓋を開きますと、出てきたのは、白飯と塩と大根。友人

は目を丸くし、

「もしやこれはかつて伺った『三白』ではございませんか」

「どうぞ、存分におあがりください」

友人は箸を手にし、ひと口、ふた口と食べ、

「世間では、これこれはかくかくに調理せねばならぬとか、いろいろに申しますが、空腹にまさる味付けはありませんですな」

「それこそが『三白』の真骨頂であります」

「しかし、たしか今日は『糞飯』とのお誘いでございましたが」

「俗に無と糞は発音を通じ、糞は毛に通じます。つまり、塩は色が毛く、大根も色が毛く、飯も色が毛い、よって三つの毛しで「糞」であります」

「いやはや、そこにはとんと気づきませんでした。『三白』こそは何よりのご馳走

と、これからは世に宣伝するとしましよう」

——ふーん。いまちようど旬の秋刀魚が焼けたけど、「三百」がご馳走と言っただから、身はボクが食べて、トバー君は大根おろしだけでいいよね。

でもさあ、「三百」ばっかじゃ、やっぱ体がもたないよね。奥さんも小さい子もいて、みんな栄養失調になっちゃうよ。ホントは別のものも食べてたんじゃやないの？

㊦ 幸いと支援して下さる人がいて、魚や肉のお裾分けにあずかることもありました。当時の社会には、苦学生を応援しよう、士大夫しだいふどうし助け合おうというよき風習がありました。

しかし、美風といわれるものの裏には実益もありまして、支援した相手が将来官僚として高い地位に就いて何かと見返りが得るということもままありました。官僚になった士大夫どうしが横に連帯し、そこに商売人も加われば、利益の相互供与が行われるであろうことは容易に想像できますでしょう。

——つまりそれって、露骨にいうと、賄賂がとびかたりして、官僚制の腐敗ってヤツだよな。

① 父の俸給について言いましたが、当時の官僚の正規の給与は意外と少なく、ぎりぎり生活できるに足る程度でした。十分な収入を得て余裕のある暮らしを望むのなら、官僚ならではの特権を有効に活用するということになります。それを

あらかじめ見越しての給与水準であったと言うべきかもしれません。官僚は税金を免除されます。官僚のもとに名目だけでも農地を集めればごっそり税金が節約できます。あからさまな不法行為をしなくても、利益を得られることがいろいろとありました。私たちの時代以降は、士大夫とは、官僚であり大地主でありそして大商人であるというのが当たり前のようになって行きました。官僚である当の本人が直接商売をするのではなく、兄弟や親類が力を合わせて一族としての繁栄を目指したのです。権力と富の集中する都においては、そうした利益追求と利害の対立が先鋭的に現れ、都にいい思い出がない一つの理由になっています。

——トバー君って、カネまみれのドロドロしたのが好きそうじゃないもんね。いまのを聞いて、お父さんが、まっとうにして大いに利益のあるような夢のよう

なことを追ったってという意味も、なんとなくわかってきたかも。

㊦ ついでに言うと、有望な独身の受験生を見つけて支援し、自分に適齢の娘や姪がいればその婿にし、一族の内に取り込んでしまうということもよく行われました。科挙は実力勝負で、親がいくら偉くても息子が合格できるものではないので、優秀な婿を取るのが有効な手段となったのです。私の場合は早くに妻を迎えていたので、そのようなことはおこりませんでしたけれど。

さらについでに言うと、同じ年の科挙に合格した者は「同年」といって、学校どうねんの同窓生のように深いつながりで一生結ばれるのが一般的でした。私たち兄弟は、発表直後に母が亡くなったために同年との交わりをもつ機会がありませんままに帰郷してしまったので、3年のブランクを経て再スタートとなりました。

士大夫に交際に関連してもう一つ言っておくと、都についてすぐの4月に梅堯臣ばいぎょうしんが亡くなり、その弔問の場で初めて顔を合わせた方が大勢いたというのも何かの縁であったのでしょうか。

——梅堯臣っていうと、トバー君の答案がいつて見出した人だよ。もし、その人の目をスルーしていたら、結果が違っていたかもしれないだよ。

Ⓣ 亡くなったのは、いまでいう感染性の胃腸炎によるものでした。現在とは比較にならない不衛生な都市環境に大勢の人間が集まって暮らしていましたので、都では大規模な病気の流行が頻繁にありました。このとき梅堯臣は59歳で、地方の町のさほど地位の高くない仕事を地道にずっと続け、歐陽脩に呼ばれて科挙

の採点員になり、都での職務に携わってこれからの活躍が期待されています。文学、とくに詩において新風を切り開き、いよいよ円熟期にさしかかろうとしていたところだったので、伝染病による突然の死はまことに惜しまれ、梅堯臣の家には大勢の弔問客が集まりました。梅堯臣は生真面目な人で、正規の俸禄のほか収入がなく、安手の狭い下宿でごく地味に暮らしていましたので、そこに立派な官服をまとった人が次々にやってくるのを見て、近所の人たちは何事かと驚いたそうです。

——あのですね、詩の新風ってどんな感じ？ 一応は英詩の勉強をしたんで、ちよつと気になるんだ。文章については、耽美主義から写実主義ってことをこの前聞いたけど、それとおんなじ？ トーバー君の詩って、ちよつと理系っぽいとこ

ろがあるよね。それが新風ってこと？ それともそれはトバー君の個性？

㊦ 宋という時代のなかでいうと、華麗な文字を並べて感覚的な美しさを追求するような詩から、梅堯臣以降は、現実を正面から見据えて、思索を織り込む詩へと変わりました。少々理屈っぽくなるので、理系的な印象になったりもするのでしょうか。もつと視野を広げて見ると、唐の時代の演歌調の詩から、宋の時代のフオーク調の詩へと、梅堯臣は大転換を図ったと、あえて誤解されることを承知の上で言うことができるでしょうか。

——つまり、こんどノーベル文学賞が発表されたボブ・ディランみたいな人だったってこと？

㊦ 梅堯臣には派手なところはなくて、官僚としてきわめて地味でありましたし、文学上の大きな仕事をしたとはいえ、その詩もごく地味でした。誤解ついでに言うとうと、唐の詩風は、「人生は悲哀に満ちている!」「俺は悲しくてならない!」と、感情を強く歌い上げるのに対して、宋の詩風は、「生きるとはどういうことか?」「彼女は窓辺に佇んでいます」と、淡々とつぶやくように歌います。主たるテーマは、精神の極限状況から日常の情趣へと移行しました。

——ふーん、なんかよくわかんないけど。言葉で説明してもらおうより、梅堯臣の詩を聞かせてもらえる? 実際にどういうもんか聞いたほうがたぶんわかりやすいと思うんです。

㊦ 先に誤解させて後で言い訳するようですが、唐の詩風と宋の詩風には全体として見れば違いがあつても、当然のことながら人によって詩風は異なります。日本人と中国人とはこれこれこんなところが異なると、国民性の違いを論じることがよくあつても、実際には日本人と中国人の差よりも、日本人同士、中国人同士の間にみられる差の方がずっと大きいというのが人類学の常識でありましょう。つまり、二つの集団でそれぞれに平均値を出して、その二つの平均値の差よりも、集団内にみられるばらつきの方がずっと大きいということです。

——やっぱ、言うことが理系っぽいよねえ。

㊦ 梅堯臣は宋の詩風を代表する1人であっても、宋のなかにおいてはやや特異な存在だということをご承知おきください。

それでは、最近の猫ブームで、一部のマニアの間で知られるようになった詩をご紹介しておきましょう。

大きな白い斑点が五つある猫。

君がきてから、私の本は鼠にかじられなくなった。

ある旅の空だった。

君はひよっこり船に乗り込んできて、

それで私のところに棲みつくことになった。

その君が今朝、死んでしまった。

私は、飯と魚を供え、君を川に流し、けがれをはらった。

そのようにしたのは、

君をうとんじたからでは決してないのをわかってほしい。

いつだったか、君は一匹の鼠に食らいつき、

そいつをくわえたまま庭先を走り回った。

そこらの鼠どもをおどかして、

私の家から鼠の害を一掃しようとしてくれたのだろう。

君にやるものといえば、

乾いた飯粒がわずかばかりだった。

それでも、どこかで腐った余りものがありつくよりはましだったはずだ。

そんなものでも君に働きがあればこそで、

私のために任務にいそしんでくれたことでは、
鶏や豚より優るものがあつた。

世間の人は物を引っ張ったり運んだりでは、
馬や驢馬の方がずっといいと言う。

優劣をあれこれ言い出したらきりが無い。

君のため、しばしの間ただ悲しむとしよう。

——ネコの詩かあ。いまのを、ギターをひきながらやってくれたら、ちよつとフ
オークつぽくなるかもね。ネコが死んだんで、思い入れたっぷりに、

タマが死んでえ、タマが死んでえ、あーああ、なみだア雨エ

なんて、こぶしをまわして演歌っぽく歌っても笑っちゃうよね。淡々と語った方が悲しみの表現として似つかわしいってことなんだろうね。ネコを詩に詠むのって、珍しかったの？

㊦ 前例はほとんどなく、梅堯臣の後では、陸游りくゆうという人が猫の詩をたくさん詠んでいます。いくら注釈をべたべた付けてもまずい詩はまずいままだと言った人です。

この詩を作ったとき、飼猫の死を詩の題材にしても共感を得にくいだろうとのためらいが梅堯臣にはあつたはず。そのようなためらいをはねのけて、日常の暮らしのなかで詩の世界を広げて行ったのが梅堯臣の大きな功績でした。蚯

蚓を詠んだり、蛆虫を詠んだりと、美的でないものをも積極的に取り上げ、その点で特異な人でした。

もう一つ梅堯臣の詩を聞いていただきましょうか。いまなら別にどうということのない感じでしょうけれど、それまでの詩の常識を破るものでした。

船は溪流に乗って、青い川との合流点にきた。

そこからは川が曲がるごとに山が入れ替わり、

そのたびにひしひしと愁いが増した。

葦の繁みのなかに緑色の鳥がいて、

雄と雌とが互いに呼び合っていた。

その二羽が空中に飛び出て波をかすめ、

赤いくちばしで小魚をすくい取り、

向こうの洲に降りてつえばみ、

そしてまたともに鳴き交わした。

私には翼がない。

この鳥たちと同じ楽しさを、

君とわかちあいたくてもいまはできないのだ。

——えーと、これって恋の歌？

㊦ 「君」と呼びかけている相手は妻です。このとき梅堯臣は職務で短い間でし

たけれども家を離れ、妻が恋しくてこの詩を書いて贈ったのです。

——へーえ、愛妻家なんだ。新婚だったのかな。

ⓧ たしか結婚して10年ほど経ったころの詩です。妻に対してこのような恋の詩を詠んで贈るといふのはほとんど前例がなく、そもそも妻に恋の情を抱くということが常識的ではなかったと言ったら驚かれますか。結婚は男女の恋の帰結としてあるのではなく、親や周囲の定めによって成立し、夫婦間は恋のような不安定な情によって結ばれるのではなく、家を永続させるといふ揺らぐことがあつてはならない共同目的意識によって結ばれるということでありました。恋は、日本の和歌では最も大きなテーマであつたのに、漢詩ではそうではなかったのは、結婚のあり方の違いがその背景にあります。

梅堯臣には妻への恋心を歌った詩がいくつもあります。しかし、残念なことに、このテーマをその後引く継いだ者はほとんどいませんでした。

——トバー君はどうだったの？　そういえば、奥さんのことはいずれ後でということになったままだけど、いつ話してくれるのかなあ。お姉さんを不幸な結婚で失くしたトバー君のことだから、奥さんには深い愛情を注いでいたと想像してるんだけど。

①　我が妻は、私が30歳のときに他界しました。話が順にその時点に及んだところでもまとめてお話ししたいと思います。

ここで、何と言うか、あなたの期待をたぶん裏切るようなことを言っておきた

くなりました。私が900年以上昔の時代を生きた古臭い封建男子であることを改めて認識しておいていただきたいと思います。40歳のころでしたけれど、私の家には一時期、第二夫人、いわゆる妾めかけという女性が複数いました。ちよつと驚きましたか。

——へーえ、そうだったんだ。だからといって、別にボクの期待を裏切りはしないよ。どっちかかっていうと軟派のトバー君のことだから、お妾さんがいたって別に構わないさ。堅苦しい倫理を振りかざす気はないし、昔といまとは考え方がいろいろ違っていて当たり前だもんね。問題は、その女性たちにちゃんと愛情を注いだのかってことだよ。愛情の欠落した悦楽を求めたのだったら、なんかキモよなあ。

㊦ 妻が亡くなり、その後で2人目の妻を迎え、それ以外に数人の女性がいたのは、妾を持つのは当時の社会ではごく普通のことだったから、私もその習慣に無自覚に従ったというわけではありません。金銭によって縛られた女性を解放するには、妾として自分のもとに引き取るのが最も手早く実行できる手段だったからそうしたのです。それを重ねるうちに人数が多くなり、ご指摘の通り、肝要なのは愛情ですから、私はあるとき1人だけを残して、あとは他所にしかるべき落ち着き場所を別に見つけたのでした。

——ふーん。詳しくはまた後のお話つてことで、もとにもどすと、受験というのはなんだったの？

㊦ 科挙とは別の特別な試験である制科せいこが実施される見通しであるから、ぜひ受けるようにと大勢の人から勧められたのでした。制科は特異な才能をもった人を選抜する試験で、合格すれば科挙以上に栄誉であるとともに、特別なエリートとしてその後の出世のスピードが違います。だから受けることにしたと思いますか。

——どうだろうか。トバー君のことだからあんまりへんな欲はなさそうだから、目の前に難関があればチャレンジしてやろう、自分を試すってことだったのかな。

㊦ スーパースターの欧陽脩おうようしゅうに「君たち兄弟の実力を証明するまたとない機会である」と言われました。我が父は科挙にも制科にも失敗していましたので、父の

代わりに合格したいという思いもありました。

私たちが受験を決意したことから、翌年の秋に制科が実施されることが本決まりとなりました。というのは、制科は皇帝が必要と認めるときにだけ行われるもので、いざ実施してみたけどしかるべき受験生が集まらなかったというのでは格好がつきませんから、事前にどれだけの人間が受けるかという見通しを立てておく必要があったのです。

制科は受けるだけでもハードルが高く、それなりの地位にある人の推薦が必要で、なおかつ50篇の論文を提出して事前審査を受けなければなりません。受験を決めてからの数カ月の間、弟と2人、せつせと論文を書いて、期限に間に合わせました。事前審査を無事通過し、嘉祐6（1061）年8月17日に本試験おうかいに臨み、与えられた課題に対して6本の論文を書き、合格者は私たち兄弟と王介の

3人でした。

——たった3人なの？

㊦ 宋の時代は、都が開封かいほうにあった北宋と、杭州こうしゅうにあった南宋の二つに時代区分

され、私は北宋のなかごろを生きました。北宋の全期間を通じての制科の合格者は39人です。制科は稀にしか実施されず、合格者もごく少数だったのです。

本試験を通った3人は8月25日に皇帝が臨席する最終試験を受け、成績が確定しました。科挙で最後に皇帝が臨席する試験が行われて合格順位が決められたのと同様です。そのような最終試験の意義は、皇帝に選んでいただいたのだと受験生に強く意識させることでした。何度も言いますように、科挙が完全実力制に

なったのは宋代になってからで、この時代に生まれ合わせたからこそ自分は科挙に合格できて官僚になれた、科挙の制度を保障し、自分の才能を評価してください。合格者のおかげであると、合格者の誰もが思ったのです。そのことから、宋代の科挙出身者の忠誠心は、いまでは想像しにくいほど強いものがあつたということは何となくご理解いただきたいと思えます。

——忠誠心とは100パー無縁のボクでも、科挙のことをいろいろと聞かされて、なんとなくはわかるような気がするよ。科挙は、有能な人材を皇帝のもとに集める非常にいい仕組みだったってことだよね。



しかし、さきほど言いましたように、官僚、大地主、大商人の一体化が進み、

官僚になればたちまち莫大な財産が築けるということになる、国家や民衆のためというよりも、一族の繁栄のために何がなんでも科挙に合格したいということになって、後の時代には競争がますます激烈化しました。命懸けの膨大な数の受験生をさばくために試験制度はどんどん厳密化され、受験競争はきわめて苛酷なものになりました。その一方で、官僚制度はますます腐敗するというまことに珍妙なことになったのでした。私たちが反対した王安石の科挙の改革が目論見通りに進んでいたら、宋の時代のうちに科挙は廃止になっていた可能性もあったのですが。

——あのさあ、いまふと思っただけど、皇帝ってというのがどうして中国にはいなかったらう？ 科挙と皇帝は非常に親和性が高かったってことだよ。ただ、

官僚は厳密な試験で選ばれて、しかし、皇帝は世襲で、アホでもなれたっていうのは、なんかヘンじゃない？ そのことに気づいた人っていないなかったの？ ジョン・クレアの詩で、中国の王様をあとからあとから生えてくる雑草の比喻に使っていたけど、ジョン・クレアの時代に至っても、始皇帝のときと同じような皇帝がいたっていうのが、ジョン・クレアとしては笑っちゃうようなことだったんだと思うよ。中国の最後の皇帝、ラストエンペラーは20世紀までいたんだよね。宋は当時の世界のなかで進みすぎたところがあつたって言うってたけど、皇帝なんかいらないうじゃないって、そんな議論はなかったの？

㊦ コロンブスの卵で、言われてみたらすぐにそうだとわかるようなことでも、

発想の転換というのは非常に難しく、さすがにそこまでは誰も思いつきませんで

した。

集団における意思決定のプロセスとして、最終的には特定の個人の判断に帰すというのはごく普通でありましょう。一般企業には社長という人がいます。その最終決定者の地位が、親から子へと引き継がれるということも珍しくはありません。皇帝と呼ぶか天皇と呼ぶか王と呼ぶか、世襲の君主を上置く国家は近代までごく一般的でした。中国においてそれがとりわけ強固であったことには、再三出てきている「天意」が強く関係したのだろうと思います。宇宙を貫く法則に従うことが、人間として正しく、社会として正しく、「天意」に適うとされました。正しくないときには、何らかのかたちで「天意」が示され、人間は正すように努めなければなりません。天界と人界の結節点に立つて、「天意」を受けて人間社会のリーダーとして行動するのが皇帝です。もしも皇帝がリーダーとしてふさわし

くない行為を重ねたならば、天のとがめを受けてその座を降りなければなりません。時としては王朝が交替する事態となり、それを易姓革命えきせいと言います。皇帝の地位にある者の姓が替わるという意味です。唐の皇帝は李姓りで、宋の皇帝は趙姓ちようでした。このような「天意」の観念が非常に強固であったために、中国では意思決定のプロセスを下から積み上げて行くという考えが生まれにくかったのです。う。ちなみに、選挙という言葉は、昔の中国では科挙のような人材登用の仕組みを指し、それもまた上から選び取るということでありました。

——発想の転換でいうと、議会制民主主義というのは人類が何千年もかけてようやく手にした大変な発明品ということなんだろうけど、そのうちAIに取って代わられて、なんで昔は政治をバカな人間に任せて平気でいられたんだろう、意味

わかんない、なんてことになったりするのかもね。人間の判断って、間違えてばつかだもの。

それで、皇帝が臨席する最終試験って、本当に皇帝が目の前で見ていたの？ だったらかなり緊張しちゃうよね。

㊦ 目の前ではなくて、かなり離れたところでしたけれど、その緊張感は大変なものがありました。そうした状況下でも落ち着いて答案が書けるかということも試されたのです。

このときから20年ほど後に、制科の最終試験を回顧した詩がありますから一部を聞いていただきましょうか。試験のときの皇帝はすでに他界し、そのありし日のお姿を妙善みょうぜんという肖像画の名手が画いた絵を見ての詩です。

思いつくのは、

制科の試験で先の皇帝のお姿を拝見したときのこと。

受験生が御殿の内へと導かれると、

東西の庇には、珠を連ねた簾と翡翠の幕がかけられていた。

受験生は、紫の衣をまとった皇帝付きの役人の前にひざまずき、

皇帝のお言葉を頂戴した。

そこに天上からの香りが流れきて、

皇帝がお出ましになった。

わずかに仰ぎ見ると目がくらむばかり、

海から朝日が昇りくるかのようにであった。

試験が終了し、

皇帝が門からお出になると、

紗の張られた廊下にはいつまでも光が満ち溢れていた。

私のような野人は皇帝のお顔を拝見することはとてもできず、

皇帝の眼差しから発せられた光を感じ取ったのだった。

もとの詩では、皇帝にふさわしい荘重で華麗な語彙をたくさん使っています。日本語には移しにくいので、意味だけを訳しました。

——それで、試験の最終成績はどういうことになったの？ 3人しかいないのに、わざわざ1位から3位までを決めたの？

㊦ 制科の成績は1等から5等の5段階評価で、1等、2等は付けないことになぜかなくていて、4等以上が合格でした。結果は、弟と王介が4等、私が3等でした。

——じゃあ、トバー君が1番ってことかあ。トバー君って、ホントに優秀だったんだね。歴史上の有名人だもんなあ。大天才なんだよね。なんかいまここにいるトバー君とは、違和感ありありの有明のハーバーは横浜ベイスターズを応援していますって感じなんですけど。ベイスターズって、いつか1番になれるのかなあ。トバー君のヘソのごまでも煎じて飲ませてもらったらいいかも。

そんでさあ、難しい試験を優秀な成績で突破して、嬉しかった？ 鼻高々の高

田馬場だった？

㊦ 都への旅の間に杜甫とほの向こうを張って詩を作ろうとした私ですから、これと一段と自信を付けて、ご指摘通りであったのだらうと思います。そのようであるとの自覚はなかったのですが、自信過剰の手痛いしつぺ返しをすぐ後で食らうことになりました。

——何があったの？

㊦ 初めての官僚生活で、たぶん次回あたりにお話することになるでしょう。

自信過剰であった証拠として、制科の試験から13年後に、合格後の気分を振

り返った詞がありますので、紹介しておきましょうか。

いま詞と言いました。詩と詞は日本語で発音すると同じ「し」で区別がつきませんが、詩と詞は、いささか趣きを異にする韻文兄妹です。いつものように誤解を承知で単純化すると、詩はスーツを着た兄、「詞」はカジュアル服の妹、兄はすまして音読し、妹は楽器に合わせて歌います。

詞は曲に乗せて歌う歌詞として唐の時代に誕生し、おもに遊里にいる女性によって歌われました。同じ曲に対していろいろな人がさまざまに歌詞を付け、女性たちの心を捉えたものが流行りました。詞は歌うためのもので、曲名が必ず付されません。曲名と詞の内容は関係がないのが普通で、いまでいえば、サザンの「東京VICTORY」に合わせていろいろな人が作詞をし、東京とはまったく無関係の歌が多数できていくようなことです。詞は、まず曲があつて、字数や音調が

決まっているところに言葉を入れ込むので、詩よりも作るのが面倒です。その成り立ちからして艶っぽいものが多く、詩では表現しにくいなよとした心情を歌い上げるのに適しています。私は官僚になってから、遊宴の場で妓女の歌う詞を聞いて興味を持ち、自分でも作詞を試みて、詞には大きな文学的可能性があると気づきました。

日本語の自由詩に訳すと、もとが詩であろうが詞であろうが、違いがなくなってしまうのですが、少しだけ訳し方を工夫してみましようか。詞は、歌に1番、2番があるように、多くの場合に前段と後段に分かれます。途中でひと呼吸置きます。

ひとりぼっちの宿の青いともしび、

野中の家の鶏の声、

旅の枕の上で夢が崩れます。

月の光が広げていく絹のべール、

明け方の霜のようなほのかな白、

山がまとう錦の色合い、

すべてをしっぽりと朝露が包みます。

おさまるところとてない世間の路、

疲れ果て限りがある私の命、

おたおたするばかりで飲びは少ししかありません。

もうやめにしようこのつぶやき、

馬の鞍に身を委ねてただ無言、

過ぎ去ったくさぐさを思います。

かのときに都にきた君と僕、

そっくりだと言われたのは史上名高い天才兄弟、

筆の先から飛び出す千文字の文章、

胸におさまる万巻の書物、

皇帝になっていたぎょうたぐのは堯しゅうや舜しゆんのような聖天子、

僕らさえいれば難しくはないと思ったのでした。

用いるか捨てるかを定めるのは時代、

出るか隠れるかを定めるのは自分、

手を袖につっこんで暇を決め込んでももういいのではないのでしょうか。

身はずっと健やか、

ただ遊んで終わらせようとするこの歳、

しばらくは一斗樽の前に身を置くとしましよう。

この詞は旅の途中、朝早くに馬上で詠み、手紙に書き添えて弟に送りました。自分の心の内にあるもやもやをそのまま弟に伝えるには詞という形式がよかったです。

——これは理系っぽさはないよね。なんかいやなことがあって、もうやめちやいたいって、そんな感じだったの？

Ⓣ 自信過剰のしっぺ返しよりもずっと大きなことがあって、心が折れかけていました。制科に合格した直後に、堯や舜のような聖天子に皇帝になるのも我等がいれば難しくはないと思つたのは、まさしく自信過剰に他ならなかったのでしょうけれど、未来は必ずよくなって行くとの当時の士大夫意識を反映したのもありました。

堯や舜は、人間の世界に初めて秩序をもたらした偉大な聖天子であると、我等は信じていました。我等士大夫がおそばで補佐することによって、宋の皇帝がそのような聖天子と並ぶ偉大な皇帝として後世から評価されるようになるに違いないと考えていました。4人のスーパースターがいて、その前の諸先輩もいて、我等兄弟がそれに続き、そして後輩も続いて、連綿と志が引き継がれて行くことで、宋の時代はどんどんよくなっていくと考えていたのです。しかし、そうではない

との現実面に直面したのがこの詞です。

——ふーん。とすると、制科の合格がトバー君の自信満々のピークで、話はだんだんと下り坂になって行くってことなのかなあ。

① 先に進める前に、受験勉強中にあつたことを三つばかり付け加えておきたいと思います。

一つは、伯父の蘇^{そかん}渙に都で会いました。伯父は我が蘇の家から初めて出た科擧の合格者で、このころまでに官僚として三十数年のキャリアを積んでいました。ある地方官としての任期が切れ、次の任務が決まるまでのしばらく間、都に滞在していました。

「ここで『三元』さんじょうという言葉を紹介しておきましょう。『三元』とは、宋という国家にあつた三つの過剰なものです。冗兵、冗官、冗費の三つで、つまり、兵士が多すぎる、官僚が多すぎる、したがって国家の費用が多すぎるということです。『手本は范仲淹』はんちゆうえんの范仲淹以来、『三元』をいかに削るかが大きな政治課題となっていました。容易に想像ができるよう、身を削る改革は抵抗が大きく、范仲淹は失敗したのでした。

科挙は、士大夫層の要望に応えるかたちで、国家が本当に必要とする以上に合格者を出していました。ポストを増やして冗官ということになっても、供給過剰のためにだぶつきは解消しませんでした。任期が切れたらすぐにその次の任務が与えられるということには必ずしもならなくて、うかうかしていると就職浪人になってしまうので、都で就職運動をしなければなりませんでした。

——へーえ、そうなんだ。官僚も案外と厳しいんだ。だったら、ポストを削ろうなんていう改革には反対するよね。

① いつ浪人になるかわからないとしたら、ポストに就いている間に、稼げるものを稼いでおこうと、不埒な考えをもつ者も出てくるという情けない話にもなります。もちろん伯父はそういう人ではありませんでした。

私は伯父に官僚としての心得を尋ねました。

「君はもう十分に心得ている。私から言うべきことは何もない」。

「いえ、私にはまだ何の経験もなく、何もわかっておりません」

「経験はすでにある。君は『刑賞は忠厚の至り』の論文を書いた。それが立派な

経験だ。君はすでにわかっている。あの論文の書いてある以上のことはない」

「あれは文章として書いただけです。どうか伯父上のご経験を踏まえたお知恵を授けてください」

「君は試験の場であの論文の題と初めて向き合い、知恵を巡らし、筆を執り、立派な論文を書いた。政治もまったく同じだ。何かしら事が生じて、我々はそれと初めて向き合う。大事なのはそのときにどうするかだ。性急に動いてはならぬ。

十分に知恵を働かせ、よくよく納得した上で手を下すのだ。君が試験の場で十二分に力を発揮したことを見れば、政治の実際の局面においても誤ることはない。わしにはわかる」

——めっちゃや、ほめてんじゃん。

㊦ 伯父は幸い次の任務を得られ、制科の試験日の少し前に新たな任地に向かい

ました。時は秋のはじめ、折悪しく何日も雨が続き、都の東の門の外で、父と弟と私は、降りしきる雨の向こうに伯父の馬列が消えるまでずっと見続けました。

3人ともが立ち去りがたい思いであったのは、何か予感があったのででしょうか、それが伯父の姿を見た最後となったのでした。

二つ目は馬正卿はせいけいとの出会いです。風変りな太学たいがくの学生が在るとの噂を耳にしました。叔父を見送って二日ばかりして雨が上がり、気晴らしに外に出て、ふとその学生の下宿を訪ねてみようと思いい立ちました。

——えーと、「たいがく」の学生って言ったよね。「たいがく」ってどういうもの？

㊦ 古い伝統のある国の教育機関です。貴族が力をもっていた時代の名残りとして、主として高級官僚の子弟が入学を許されていました。科挙が完全実力制になっても、既得権を子孫に伝えたいという欲求にもある程度は応える仕組みがあり、その一つは、高い地位に昇った者の子弟を、科挙の試験を課すことなく官僚として採用する蔭位おんいの制度でした。科挙の合格者に比べると低い地位からスタートしなければならず、昇進のスピードも遅いというハンディがありました。それでも官僚になれるのは大きな特典でした。范仲淹が取り組んだ改革にはこの特典を将来的には廃止することが盛り込まれていて、当然のこととして強い反発を受けました。もう一つが太学です。高級官僚の子弟は太学で科挙の受験指導を受けたり、優等生は科挙を受けずに官僚として採用されたりもしました。王安石は学校制度

の大改革も視野に入れていて、特権階級のための学校ではなく、広く門戸の開かれた教育システムを作ることを考えていました。

馬正卿は早くに父母をなくし、両親を埋葬することさえできほどに困窮し、身を立てるには科挙に合格するしかない、懸命に勉強に励んでいました。その様子を憐れんだ親類筋が力を貸して、太学に入れてもらったのですが、太学の実態を見て馬正卿は愕然としました。太学は教育機関としての態をなしていなかったのです。定まったカリキュラムのようなものはなく、ろくに学生を指導しない教官ばかりがいて、遊び呆けている学生がたくさんいました。地方から出てきて色里の遊びを覚え、親の仕送りを全部使ってしまうなどという輩がごろごろしていました。馬正卿は怒り、太学の門に立って太学を批判する演説をぶちました。イノ君は知らないでしょうけれど、日本でも団塊の世代が学生であったころにさか

んに大学批判を行ったものです。馬正卿に同調する者は1人もいなくて、教師からも学生からも奇異の眼で見られ、親類筋からは、今度こんなことをしたら支援を打ち切るぞと脅されました。

あちこち尋ねて馬正卿の下宿に行き当たると、あいにくと不在で、近所の人に聞くと、近ごろは野菜を担いで売り歩いていて、売り切ったら帰ってくるだろうがいつになるかはわからないということでした。太学の学生がなぜそのようなことをしているのかいぶかしく思いながらも、さらに興味をひかれるものがあって、近所の人に断って、中に入ってしばらく待つことにしました。

馬正卿の下宿は夜具だけでいっぱいになってしまいうようなごく狭いもので、すみに書物を入れた箱があるのがかろうじて学生らしいところでした。壁を見ると、太い文字で七つの文字が書いてありました。

長安布衣誰比数 ちやうあん
(長安の布衣 誰か比数せん)
だれ ひすう

これは杜甫とほの詩から取ったものでした。杜甫がまだ官僚になれずに長安で苦しい日々を送っていたところに、折からの秋の長雨で物価が高騰して生活がますます厳しくなり、「秋の雨の嘆き」という二首からなる詩を詠みました。そのなかの句で、「長安の都で粗末な服をまとう自分などは誰も相手にしてくれない」というのがこの7文字の意味です。

馬正卿の心の内をあれこれ想像しながら待つうちに、あたりがうす暗くなってきましたので、壁にやはり杜甫の詩から取った7文字を書き、自分の名を添えて、下宿を後にしました。

此道今人棄如土

このみち
(此道は今の人は棄てて土の如し)

これも杜甫が官僚になる以前の詩で、貧乏だった若い時代に結んだ友情を生涯大切にしたい昔の人に思いを寄せて、いまはそのような友情を結ぶ者がいなくなったと嘆いたのです。

——それを壁に書いたというのは、友達になりましたという誘いだよね。

㊦ 都にきて以来、いろいろな人との新しい出会いが多々あり、楽しくもあり、

得るものもたくさんあったのですが、何かしら物足りないものを感じていました。

本当に心を許しあえる相手には会えずにいたのです。

——それはさあ、トーバー君が優秀すぎて、相手が近付きにくく感じたってこともあったんじゃないのかなあ。

㊦ 壁に杜甫の句を書いても、馬正卿は十中八九きてはくれまいと思っていました。だってそうでしょう、私は科挙に合格し、高い地位にいる方々の推薦を得て制科の試験を受けようとしていたのです。そんな者からの誘いなんぞは、悪い冗談としか受け止めてくれないでしょう。案の定、馬正卿はきませんでした。私の間もなく試験を受けて合格し、なんだかかんだとあわただしく過ごすうちに、馬正卿のことは忘れてしまったのでした。

——えつ、そうなの。でも、さつき、出会って言ってたけど。

㊦ 話は順に進めましょう。三つ目は弟です。

受験勉強などというものはとにかく早く終わって解放されたいと思うのが普通でしょう。私の場合は、試験が近づくにつれて、兄弟机を並べての勉強に終わりがきてしまうのを惜しむ気持ちが強くなりました。同じ本を一緒に読み、同じ主題で論文を書き、書いたものを読み合せて疑問を出し、議論して考えを深めるということは、弟がいなければできないことでした。自分ひとりだけの勉強であったならば、思索を1センチ掘り下げものも難しかったでしょうけれど、弟がいてくれたことで1メートルでも10メートルでも100メートルでも、いくらでも

深く掘り下げて行くことができませんでした。試験が終われば、合格するにせよ不合格になるにせよ、兄弟はそれぞれに職を得て、別々の任地に赴くこととなります。

弟と勉強できる機会はその先にはもうないのです。

ある日のこと、勉強の合間に唐の時代の詩集を手にしていた弟は「うっ」とうめくような声を上げ、

「兄上、これを見てください」

と、差し出したのが次の詩でした。

ここでの仕事を終えて私は去ろうとしている。

もろもろの事情に曳かれて君たちはここに残るといふ。

とすれば、このような雨と風の夜に、

床を並べて一緒に眠ることは、

この先いつまたあるとはわからない。

さあ、三人であの南の池で飲んだときのことを話そう。

さあ、あの西の楼閣で詠んだ詩をまた吟じよう。

三人がまた揃うのはたやすくはないのに、

歳月はひたすら流れてしまうものなだから。

この詩を詠んだのは韋応物いおうぶつという人です。杜甫よりも少し後輩で、15歳で玄宗げんそう

皇帝の身边警護をする兵士になりました。玄宗皇帝が楊貴妃ようきひを伴って皇居を出て

遊宴に向かう折りなどに、美々しく着飾って馬にまたがり、皇帝の前後を護衛す

るといふ華やかな役目を担っていました。皇帝との距離が近いことから、何かと

特権があつたのでしよう、都の繁華街を肩で風を切つて歩き、放蕩を尽すという、なかなかの無頼漢でした。同じときに長安にいた杜甫とはまったく対照的でした。

ところが、19歳のときに安祿山の反乱が勃発し、皇帝は都から逃れ、韋応物は置き去りにされてしまいました。そこでそれまでの生活を深く反省し、初めて書物というものを手にしました。それから学問に励んだ結果、文官として採用され、主に地方官僚としてキャリアを積み、最後は県知事クラスにまで至りました。

多くの詩を詠み、とくに自然を詠むことに優れ、唐の時代に自然詩をよくした「王孟韋柳」の4人の1人として並び称されました。王は王維、孟は孟浩然、韋が韋応物、柳は柳宗元です。「王孟柳」の3人についてもいざれ語ることがあるでしょう。唐の時代においては杜甫よりも韋応物の方がずっと高い評価を得ていました。

いま紹介した詩は、韋応物が50歳のときにある地方の町の長官を辞めてよそに行くに際して、2人の甥に向かって詠んだ別れの詩です。

我が弟はこの詩にあった「雨と風の夜に牀を並べる」というところに感動し、私も強く共感しました。私たち兄弟は縮めて「夜雨対牀」という四字熟語を作り、この先官職に就いたならば「夜雨対牀」はできなくなるけれども、遠い将来に職を退いたならば、いまとまったく同じ心持ちで「夜雨対牀」の時を迎えようと誓い合ったのでした。

——ふーん、仲のいい兄弟だったんだね。

① 試験が終わり、私は皇帝から赴任命令を頂戴しました。簽書鳳翔府判官事と

せんしょほうしやう ふはんがんに

というのが職名でした。鳳翔府という、比較的重要な地方の行政区の知事の補佐役です。いまでいうと知事の秘書、あるいは県庁の部長クラスか副知事か、そんなところに相当するでしょうか。

——へーえ、いきなり、そんな役になっちゃうんだ。トバー君ってこのときは確か26歳だったんだよね。いくら難しい試験に合格したからといって、一発で副知事クラスですか。地方の町にはきつとそこで長年勤めてきた叩き上げの人とかいたわけだよね。「若造がポンときやがって、おもしろくねえ」ってなことになつたりしなかったの？

ト

たぶん、あったのでしよう。私は最初の間は気がつかずにいたのです、さき

ほど言ったしつぺ返しを食らうまでは。

それはさておき、私には辞令が出ず、何ら音沙汰がありませんでした。あとで聞いた噂では、弟に職に与えることに難色を示した人がいたらしいのです。

——— どういうこと？ 弟さんは嫌われたの？

ⓧ 弟と私とで、問題を起こすとしたら決まって私の方でした。しかし、このときばかりは弟の身に降りかかったのです。

横浜ベイスターズにちなんで野球にたとえますと、弟は直球しか投げないタイプで、私は豊富な球種を見せびらかすかのように投げるタイプでしょうか。いやらしいピッチャーとして嫌われるのは普通は私の方であっても、ずばっと一発最

もいやなところに速球を食らったらむかつくということもあるでしょう。弟が制科の答案として書いた論文のなかに、現在の政策を批判していると読める箇所があり、一部のお偉方を刺激したらしいのです。試験の場を利用して体制批判をするのはけしからんと、合格発表の前にも横槍が入り、赴任先を決める段階でさらに妨害が入ったらしいのです。それが事実かどうかはわかりません。ともかく、私だけが辞令を受けて先行して都を出ることになりました。

鳳翔府は都から西へ、当時の勘定で1170里離れ、かなりの長旅です。家族を連れて陸路の旅。今度は官僚としての移動でしたから、宿場ごとにお上のご用のために調達された馬を使うことができました。

父とは都の門の外で別れ、弟は「いましばらく」と私と馬を並べ、そのまま次の町にまできて、その夜は一緒に泊まりました。雨ではありませんでしたが、「夜

雨対牀」の最後を惜しんだのでした。

そして翌11月19日の早朝、弟との別れのとかがきました。寒い朝でした。

「もう付いてくるでない。父上が待つておられよう。もう何も言うな。何も言うまい。真直ぐ東に馬を向け、決して振り返ってはならない。私は西に馬を向け振り返らない」

私はくるりと背を向け、西へと馬を進め、言った通りに一切振り返りませんでした。弟が同じようにしたかどうかは知りません。

そして、ぼくりぼくりと馬が歩むにつれ、これまでに経験したことのない変化が我が身に生じました。最初にぞくつと震えがきました。寒さが身に入ったのか、風邪をひいたのでなければよいがと、襟元を引き寄せました。次に、ゆらりゆらりと体が揺れるような感覚に襲われました。馬の歩みのせいではなく、あたかも

酒に酔ったかのように、次第に身も心もぼんやりと重くなって行きました。このままでは馬から落ちかねないと、手綱をきちつと握ろうとしても力が入りませんでした。あたりが朦朧として、私は奇妙な感覚に身を任せるしかありませんでした。

酔っているときには、万の思慮が一掃されて心はからっぽになり、

醒めると、によきによきと草が芽生えるように億の思慮が湧き出てくる。

この通りのことが、酒など呑んでもいないのに起こったのでした。とろんとした心持ちになり、しばらくすると、ある一カ所だけがはっきりとしてきて、そこから芽生えるものがあって、ひゆるひゆると伸び出しました。伸びた先は細く鋭く

なり、その先端の一点からぼんと飛び出たものがありました。言葉でした。一つの言葉が出ると、後から後から次々に続いて、それが一篇の詩になりました。

そのとき、声がしました。

「道を行く人々はだれもが楽しげに歌い、家の内にいる人々はだれもが楽しげに話しているではありませんか。どうして若旦那だけがそのような苦しげなのでしょうか」

聞いたことのない声で、「若旦那」と呼ばれたのも珍しく、はっと見ると、馬の横に1人の男がいました。

「そなたは」

尋ねますと、その男は静かに、

此道今人棄如土 (此道は今の人は棄てて土の如し)

と、唱えました。

「あなたは、もしかして」

「馬正卿にございます。これより若旦那のお馬の世話なり、なんなりと用事をさせていただけようと、ここでお越しになるのをお待ちしております」

「馬と世話とは奇妙なことを。あなたは太学の学生ではありませんか。若旦那と呼ばれるような関係でもありません」

「若旦那にお仕えするのがこれからの私の仕事であると決めて参りました」

私は馬より降り、馬正卿に向かってきちんと会釈をし、

「あなたは国のため、民のために、多くのことをなされるべきお方ではありません

んか。そのために学問に励んでこられたのではありましよう」

「もう決めたのです。若旦那が壁に書いてくださった文字を見て、そしていま馬上的お姿を見て確信しました。私の一生はかく定まったのです」

これが馬正卿と私の出会いでした。

——どういうこと？

① 馬正卿は何も説明せず、ただ己の望みを貫こうとするばかりで、他にどうすることもできなくて、この日から私に同行することになりました。聞けば、8日だけ私が先に生まれていることがわかり、私としては弟と別れてすぐに新たな弟を得たような気持ちになったのですが、馬正卿はあくまでも馬丁であろうとしま

した。

先ほどできかけていた詩は、馬正卿の出現によつて、次のようなことになりました。

酒に酔ったかのような、

ゆらゆらするこの感覚。

我が心はふわふわと抜けて、

君の馬に追いつがろうとする。

君と一緒に父上のもとへと戻って行けない私は、

置きどころを失ったこの心を、

誰と慰め合ったらいいのか。

酔いの醒めぬままに坂を登り、

とうとうここで振り返る。

波打つ丘が広がる。

際立って背の高い君のことだから、

黒い帽子が丘の高低の間に上下するのが見えるのではなからうか。

寒さが身に染みるようになったこの時季に、

薄い衣でやせ馬にまたがる君の姿を、

私はいつまでも探し求める。

同道する人が言う。

「道に行く人々は誰もが楽しげに歌い、

家の内にいる人々は誰もが楽しげに話しているではありませんか。

どうして若旦那だけが苦しげなのですか」

私は酔いから引っ張り出され、

「人生に別れは必然だ。

ただそれだけのことなのだよ」

悲しみは私だけにあるのではなく、

楽しみはほかの人々だけにあるのではない。

すぐにもう一つの必然を私は思う。

歲月とはたちまち去ってしまうものだ。

君と二人、

夜の雨をしみじみ耳にしながら、

灯のもとで今を昔と語り合うようなときが、

必ずあると、思っているのか。

このことをわかってくれているのならば、

君も高位高官に昇ろうとは決して強く望んだりはいはずだ。

眉山県を出てから私はたくさん詩を作りました。それらは作ろうという意識がどこかにあつて作ったものでした。このときは詩を作ろうという意識はまったくなく、言葉が勝手に出てきました。腹中の虫を吐くようにして言葉を出す、本当の意味での私の詩の最初のもものがこれであつたのだと思います。

——あのお、ぶつちやけひねくれた感想を言うと、ふぬけたことを言うなよなあつていうのもあるかもね。だって、難しい試験に合格したエリート中のエリート

として最初の任地に向かっていたんだよね。しかも副知事だよ。そんな立派なポストは普通にはなかなか就けるもんじゃないんだよね、きつと。「少年よ、大志を抱け！」じゃないけどさ、さっきの皇帝を聖天子にしようみたいな威勢のいいことを言ってくれないとカツコがつかないんじゃないのかなあ。そんなことをボクが言うのはまるで似合わないのはわかっているけどさあ、弟との「夜雨対牀」が一番大事ですみたいな態度を見せられたら、トバー君を迎える町の民衆としては「ふざけんなよなあ」「みたいになるんじゃないのかなあ。」「さつさと弟を連れて郷里に帰ればいいじゃん」って言いたくなるでしょうに。

ⓧ 手厳しいご批判です。私も「手本は范仲淹はんちゆうえん」と、地方官として誠心誠意努め

る決意でいました。それでも、心の中から自ずと出てきたのはこの詩だったので

す。矛盾しているといえは矛盾していますし、考えが甘いといわれればその通りです。馬正卿は一瞬でそれを見抜いて、自分が世話をしてやらねばと思ったのでしょうか。2人の奇妙な付き合いがここから始まりました。

この詩を都に帰った弟のもとに送り、数日後に灑池めんちという町に着きますと、弟からの手紙が先回りして待っていました。そこには「灑池めんちの旧を懐おもう」と題する詩が添えられていました。弟の詩はまだ紹介していませんので、ここで一つ聞いていただきましょうか。

都の外まで同行して別れたとき、

この時季のこれからの兄上の道のりを思い、

融けて泥のようになった雪に、

馬の脚がとられやしないかと心配をした。

私が都に戻って繁華な大通り踏み歩いていたところに、

兄上は西の山のさびしい坂を登って行ったのだろう。

道行く先には私たちに縁のある澗池がある。

覚えているだろうか、

科挙を受けるために父に伴われて初めて都へと上った五年前、

そこの僧坊に泊まり、

二人で詩を題して壁に書いたことを。

今回は兄上は一人、

そのような楽しみはない。

無言でいる兄を背に乗せて、

寂しげに馬が嘶くありさまを、

遙かこちらから想像するばかりだ。

澗池にはこの詩にある通り、前にもきていました。そのときには5年後の自分の姿を想像するなどまったくできませんでした。科挙に合格するかしないかで、人生は大きく変わったのでした。5年前にはいまがわからず、いまは5年先がやはりわかりません。そのような思いから、弟への返事の詩を、弟の詩に和す形で作りました。

詩を和すとはどういうことなのか説明がいるでしょう。中国語でも英語でも詩は韻を踏みます。韻を踏まなければ散文です。日本語の場合には韻が踏むということがないので、日本語の詩と散文の区別が私にはよくわかりません。

弟の詩は、7文字からなる句を8つ並べた56文字から成っていて、韻は14文字ごと、つまり2句ごとにその終わりにありました。韻字は泥、西、題、嘶の4つで、日本の音読みでも「でい」「せい」「だい」「ぜい」と「い」の音が揃っています。詩を和すとは、同じ韻字を同じ場所に置いて詩を作ることです。

——ということは、泥、西、題、嘶の文字を14文字目に置いたままで、尻取りの逆みみたいな感じで、言葉をはめて作るってことだよ。それって、言葉が勝手に出てきたと言っていたさっきの詩とはかなり違う作り方ってことになるよね。クロスワードのパズルを解くみたいなのとか、なんか不自然な気がするけど。



中国の古典詩には、韻の踏み方や音律に関して厳密なルールがあって、そも

そもからして言葉のパズルのような側面もありました。制約が一切なくて自由に詠んだものが自然に生まれ出てきた詩であるのでしょうか。日本語の自由詩はそうであるのかもしれませんが。韻のような制約によらずに、言葉を磨いて磨いて磨き抜くことで優れた詩になるのでしょうか。一方で、日本には日本舞踊とか茶道とかの伝統芸があります。それらには決まった型や作法があり、初心者はそれを身に付けるのに苦労すると聞きます。自由に踊り、自由に飲むのが自然なのでしょうか。型や作法をマスターした上での所作の方がより美しく、より自然で自由であるということもあるのではないのでしょうか。

詩を和すのはクロスワードのパズルのようだというご指摘は実は当たっているところもあります。詩は社交の道具でもありました。大勢の人が集まった場で、即興で詩を和せば、難しいクロスワードをさっと解いてみせるのと似て、座が盛

り上がります。瞬発力が肝要です。

弟の詩に和した私の作品を聞いていただきましょう。日本語に訳したら、四つの韻字を一応使っていますというだけのこと、そこに面白味はほとんどないのですが。

この世にあまねく存在する人生なるものは、

何に似ているのだろうか。

大空を飛ぶ雁がふわりと降りて、

融けた雪にちよこんと付けた足跡にも似ていようか。

泥の上に爪の痕が残っても、

雁は西に飛んで行ったのやら東に飛んで行ったのやら、

見当を付けることさえできない。

あのとき瀧池の寺にいた老僧は、雁が飛ぶようにこの世を去り、

真新しい墓だけが遺された。

僧坊の壁は崩れ、かつて題した詩を見ることもできない。

あのとき我等の前にあったのは、

長く遠く遥かな道だった。

折悪しくも、乗ってきた馬に死なれ、

かろうじて貧弱な驢馬を手に入れたものの、

その嘶きがまことにわびしげに聞こえたのだった。

——えーと、日本語に訳す過程で、まさか自分の方だけ特にうまく聞こえるよう

にしたってことはないだろうけど、クロスワードのパズル解きみたいな面があったにしては、トバー君の方が自由に詠んでいるなああって感じがしたんだけど。

㊦ 調子に乗って自画自賛するわけでもないのですが、先ほどの詩とこの詩は、それ以前の詩とは一線を描くものであったように思っています。修学期間が終わって、ここからが本格な私の人生、つまり語るべき「遊たひの奇絶きぜつ」の始まりということになります。

——ここまでは前置きだったってことかあ。それにしても、ずいぶん長かったかも。

① 鳳翔への旅の行程を7、8割ほどこなしたところに、唐の時代の都、長安が

ありました。唐王朝の滅亡前後に長安は繰り返し破壊され、都として栄えたところの面影はほとんど残っていませんでした。シルクロードを通って西方諸国からたぐさんの人がきていてかつての国際都市も、宋の時代には地方の中小都市に転落していました。

長安に着くと、知事の劉敞りちやうしやうに歓待され、連日連夜の酒宴で、酔いつついくつかの詩を詠みました。そのうちの一つを聞いていただきましたでしょうか。

劉知事にはオタク的などころがあつて、石を集めまくっていました。唐の時代の長安には皇族や大富豪の庭園がたくさんあり、変わった石がいろいろと置かれていました。廢墟からそれらを掘り出して売る商人がいて、劉知事は気に入ると金に糸目を付けずに買い、ところ狭しと庭に並べ。まるで石の林のようにして、

庭の四阿あずまやに石林亭せきりんていと名付けていました。そこでの詩。

かつての都は日々に荒廃し、

往時に還ることはもはやない。

やんごとなき方々の庭に置かれていた石は散り散りになり、

人間界の塵に埋もれた。

ここに一人の好事家いて、

石の重さも道の遠さも厭わずに石林亭へと曳いてきた。

ある石は氷雪に削られた顔をしかめ、

ある石は痩せ細った肩をそびらかし、

ある石は青々と水がしたたるかのようにだ。

唐の世に、奇石を好んだある人が、

石に等級を設けて刻印した。

ここにあるのはさだめし最上級のものばかりだ。

思えば、これらの石は、

ある人が失えばある人が得て、

集まっては散じ、散じては集まり、

いつまでもいつまでも循環を繰り返して、

結局のところ環わの外に出ることはないのだろうか。

人間界もまた変転を繰り返す。

自然の要害に守られたこの地に、

漢の都も唐の都も置かれ、

王朝は隆盛を極め、そして滅び去った。

これらの石はかなり重いものがあるとはいえ、

山に比べたら羽根のような軽さだ。

転々とし続けるのもやむをえないのだろうか。

酒を酌んで石に向かって問いかけようとして、

答えの出ないような問題は、

そっくり放り出すのがよいと思ったのだった。

——問題の問いかけはしなかったんだ。それって、石の変転、人の世の変転、そしてその関係にはどういう意味があるのかってというような問題？　そういうのって、納得の仕方次第で答えになったりならなかったりするのかもね。英詩を読ん

でいると、神様の思し召しみたいなところに帰着するみたいながあって、そんでいいのかいなって思ったりするんだ。

㊦ いま「環わの外に出ることはない」と訳したのは、もとの詩では「区く裏かんを出す」です。ある境界より内側が「区裏」です。歴史はある範囲内でぐるぐる回っているのか、それとも、放たれた矢のようにひたすら前に進んで行くものなのか。必然の法則があるのか、偶然の積み重ねであるのか。そのような問いは洋の東西によらず発せられたことでしょう。

長安を後にし、12月14日に鳳翔府に到着しました。いよいよ官僚としての日々が始まったのです。

このときの鳳翔府の知事は宋選そうせんという人で、私に大変よくしてくださいました。

官界に入ったばかりの私にとって、一見するとラッキーでありながら、実は必ずしもそうではなかったのです。

宋知事も鳳翔にきてまだ4カ月と日が浅く、何事も控え目にしていました。もとからごく温厚な人柄である上に、前任者の崔嶧さいえきが具合の悪いことをして辞めた後でしたので、とくに穏やかにしていたのだと思います。

——えーと、具合の悪いことってどういうこと？ ひよっとしてこの前辞めた都知事みたいなこと？

㊦ 地方行政の闇です。身臍に聞こえるかもしれませんが、宋の時代は歴史的に見てかなりましな方でした。宋は五代十国時代の混乱に戻ることがないよう中

中央集権を徹底させ、地方に対して中央から二重、三重の指揮系統を張り巡らし、相互に監視させて、特定の個人に強大な権限が集中することがないようにしていました。二重、三重であるのは無駄といえは無駄で、例の「冗官」の所以でもありません。それによって地方の長が国家に反抗するような力を養うことは不可能になりました。そうであっても、地方の長は民衆に対して行政権と司法権を有し、合法ではあるが不適切というレベルでこの前辞めた都知事とは比較にならない悪しきことができました。

ここで、説明が細かくなりますが、後の話にからんでくるので、官かんと吏りの区分について申し上げておきたいと思います。日本語で官吏といったときには、公務員、役人、公僕とほぼ同義語であろうと思います。昔の中国では、官と吏は厳然と区別されていて、吏は行政の末端の実務を担う下級の役人で、官はその上に立

って指揮管理をする役人でした。地方政治における吏はその土地で代々その役に就く者が多く、官の多くはおおむね3年の任期で中央から派遣されました。任期が短いのは癒着を防止するためです。吏はずっとその土地で同じ仕事をしているので、事情に精通し、法規や慣習に詳しいのですが、物事を決定する権限はありません。官は法規や土地の事情には疎くても決定する権限を有していました。吏はどれほどの経験を積んでも官に昇進することはまずありませんでした。官になるのは、科挙に合格した者か、高い地位に昇った人の子弟か、特別な能力を認められて取り立てられた人たちでした。さらにもう一つの大きな違いがあります。官は位に応じた俸禄を国家から頂戴しますが、吏にはありません。無報酬では食べられませんから、行政に関わるさまざまなどころで手数料、口利き料をもらって暮らしを立てていました。

——ああ、もうわかったよ。その口利きってところから、昔の時代劇によくあった「越後屋、おぬしも悪よなあ」ってなことになるんだよね。吏は生活がかかっているから自分の懐がふくらむように、民衆からカネを巻き上げることがを企み、それを上に立つ官が認めてくれるよう袖の下を渡すってことでしょ。権力を使って下から上へとカネが吸い上げられて、民衆としてはたまったもんじゃないよね。

① まさしくそういうことです。前任の知事の崔嶧はなかなか剛毅な人で、盗賊の征伐などでは立派な実績があったものの、財を貪ることもなかなかなもの、長安出身であることからこのあたり一帯に強固な人脈を築き、思いのままに私腹を肥やしていたのです。さすがに罪を問われそうになってあわてて引退した

のでした。

もちろんそんな人ばかりだったわけではなく、清廉な人もたくさんいました。しかし、潔癖すぎても具合がよくありません。官人は3年交替で知らない土地に移動し、吏人の協力なくしては何もできません。吏人は手数料や口利き料を稼がないと暮らせません。官人は吏人を上手にコントロールする必要があり、うまくやるにはそれなりのコツがあるのでした。初めての私はそうしたことには無頓着で、ほとんど放任状態であったので、吏人には歓迎されたようです。

宋知事は、前任者の後を受けていきなり綱紀肅正を掲げて厳格に取り締まっても吏人の反発を買うだけとなるので、緩やかな政治を行い、貪られた民衆の傷を癒すことに努めていました。

そのような宋知事から与えられた私の最初の任務は何だったかと思えますか。

——ぜんぜんわかりませんが、官僚としてはまるつきり初めてなわけだから、まずは地方行政の仕組みを知るとか、土地の事情を見てまわるとか、そんなところかいな。

① 宋知事はこのように言われました。

「地方官として第一になすべきはその土地について知ることです。私も鳳翔に初めてきてこのあたりをひと通り見て回りました。そして、このあたりで必ず見るべき文物を八つ数え、『鳳翔八観』と名付けました。あなたは詩作を得意とされていと聞きます。もし興が湧いたならば、『鳳翔八観』を詩に詠んでみてはいかがでしょう。欧陽脩様を初めとして都の方々にその詩を進呈したならば、ここ鳳

翔への注目度が高まるのではないでしょうか。都の方々が鳳翔に強い関心をもつてくださるようになれば、この地の民に好影響がありましたよ」

ということから、私はまずは鳳翔八観を見て詩に詠むということをしたのでした。

——へえ、トバー君にとっていい仕事だね。いま、いろんなところで町おこしのためにご当地動画を作ってユーチューブにアップしたりしているけど、あの手この手で地方に目を向けさせるっていうのは大事なんだろうね。

㊦ 鳳翔八観の8首連作の詩は、いわば私のデビューアルバムとなりました。かなり力を込めて作り、難しい語彙を多用しています。本を見ていただくと、それ

こそたくさんの注釈が施されていて、あなたはきつと即座に放り投げてしまうでしょう。

第一首は石鼓せきこを歌いました。石鼓は石の鼓つづみと書きます。楽器ではなく、高さが二尺、直径が一尺ほどの花崗岩で、ころころとした形状が鼓に似ています。石鼓は全部で10個あり、鳳翔近郊の野原にころがっていたのが唐の時代の初めに発見され、表面にごく古そうな形態の文字が刻まれていたので、古代の文化を知る貴重な物ではないかと世の好事家や歴史家に注目されるようになりました。さきほど紹介した韋応物が詩に詠み、さらに50年ほど後に、韓愈かんゆうという人が462文字からなる長編の詩を発表して、一段と有名になりました。韓愈はその詩のなかで、このまま野原で雨さらしにしておいてはいけなさと訴え、鳳翔の孔子廟こうしびやうに安置場所が設けられて収められたのでした。孔子廟とは孔子を祀った建物で、日

本にあるものでは東京の湯島聖堂がよく知られています。石鼓はいまは北京の故宮博物院に第一級の文化遺産として保管されています。

——へーえ、いまもあるんだ。で、それには何が書いてあるの？

㊦ 発見以来、さまざまな解読が試みられ、私たちの時代には、王侯が狩りをするありさまを描写していると読める箇所があることから、周の宣王せんおうの徳を称えたものであると解釈されていました。周の宣王とは、何度も出てきた周の文王よりも少し後の時代の王様です。現在の理解では、それもよりも新しい紀元前4世紀ごろのものであらうとされています。

私は、韓愈の詩を強く意識し、ほんの少しだけ短い420字からなる詩を作り

ました。韓愈は唐代における文学改革の旗手で、宋でいうと欧陽脩に当たる人でした。韓愈は、数百年にわたって流行した装飾過多のきらきらとした美文から、内容重視のごつごつとした古文への復帰を唱えて実践した人で、文学上の功績は極めて大きなものがありました。韓愈は詩の改革にも取り組み、やはりごつごつと骨ばった詩を作り、当時はまだあまり評価されていなかった杜甫を顕彰しました。韓愈の石鼓の詩に習った私の詩は、私の作品のなかでも特に硬派なものとなりました。

季節は冬、月は十二、年は辛丑。

かのとうし

政治に携わるようになったばかりの私は、鳳翔の孔子廟に詣でた。

昔から聞いていた石鼓がここにあり、

いま初めて見ると、蛇がじぐぎくに走りまわった痕のようなものがある。じっと観察し、指を使って腹の上でそっくりになぞってみた。

読み上げようとして、

唇を貼り合わされたかのように何も言うことができな

唐の韓愈は古いにしへを好み、この石鼓を見て生まれるのが遅かったと嘆いた。

それから二百年以上も経ったいま、

当てずっぽうに点や線、偏へんや旁つかりを見つけようとして、

一つか二つならそれかとわかるような気にもなる。

これまでに解読されたのは、

「ワシノ車はツヨイゾヨ、ワシノ馬モツヨイゾヨ、

魚ハコレトソレ、柳ノ小枝デツラヌクゾ」

残りの八つか九つはほとんどわからない。

太古の青銅器の破片がごろごろするなかから、

どうにか見分けられるのは鼎かえの脚だけであったり、

天界に細かに散らばる星のなかから、

どうにか見分けられるのは北斗だけであったり、

イボやらタコやらカサブタやらがぐちゃぐちゃになったなかから、

どうにか見分けられるのは肘やら膝だけであったりで、

つまりは、雲や霧の向こうに月を、

雑草がぼうぼう生い茂る野原に一本だけの稲を見出そうとするようなものだ。

石鼓は百回の戦火をくぐり抜け、

かつては文字を発明した伝説の人たちと語り合いもし、

名書家とされた人たちを教え導いたりもしたのだが、

千年の間にただ一人となって、もはや友とする相手はいなくなってしまうた。

回顧すれば、遠い昔、乱れた政治に人々はほとほと愛想をつかし、

聖王、賢臣の出現を待ち望んだときに、

天は周の宣王とその老臣を生んで、天下を立て直させた。

東方では虎のような猛将が争いを鎮め、

北方では犬のように諸民族が素直になついた。

宮殿には白い狼や白い虎が次々に献上され、

功臣が並んで参内するとたくさんの恩賞が与えられた。

勇ましく太鼓が打ち鳴らされ、將軍に耳目が集まり、

雅な音楽を奏して歌おうと思つた者はいなかったのだが、

どのようなわけかは知れず、

宣王を讃える「鴻雁こうがんの歌」が流れてきたのだった。

その歌が石鼓に刻まれたのだろうか。

それまではおたまじゃくしのような形をしていた文字が、

そのときに改められたのだろう。

宣王の勲いさおは偉大であるのに、石鼓にはあえて誇るようなところがない。

文王から遠くないこのころには、

奥ゆかしい真心がなお伝わっていたのだろう。

刻まれた年を示すような字を探そうとしてもないし、

まして、刻んだ人の名は記されるはずもなかった。

その後、周が衰えると、

七つの国が競い合った末に、秦が天下を手にした。

始皇帝は儒学の経典を放り投げさせ、

民衆に法律だけを学ばせ、

先祖を祀るための道具は片付けられ、

刑罰に使う鞭や手かせ、足かせの類が並べられた。

始皇帝を補佐したのは李斯という人物で、

始皇帝が山に登るたびに、功業を讃える文章を作って石に刻ませた。

「皇帝ハ四方ノ国々ヲ巡ッテ凶暴ヲ連中ヲ滅ボシテ人民ヲ救ッタ」

そのような賛美は前にも後にもないことだった。

始皇帝によって儒家の経典は焼かれ、石鼓も砕かれそうになった。

周が減んだときに、王者の徳の象徴とされた九鼎は川に沈んだ。

始皇帝は万人を使ってそれを掘り出して自分のものにしようとした。

暴君は己の欲望を満たすために人民の力を使い尽したけれど、

神聖な九鼎は秦に汚されることはなかった。

石鼓はどこで始皇帝の横暴から逃れたのだろうか。

天が鬼神を遣わして守ったのだろうか。

世の興亡は百変し、富貴はつかの間でしかない。

物質それ自体は変化を免れ、名というものは朽ちることはない。

物の道理をよくよく考え、

人生の長さが石鼓の寿命とは比べようもないのを思って、

私は深く嘆息するのだった。

——注釈だらけの詩をボクのためにやさしく訳してくれて、わかりやすかったんだけど、すんなりわかってしまうのも、重みがないってことがあるのかもね。わざわざやってくれたことにケチをつけたら悪いんだけどさあ。あれっ、気を悪くした？　なんか、渋い顔をしているみたいだけ。

㊦ 意味が通じさえすればいいのではなく、言葉の荘重さが内容にも影響するのは間違いありません。そのことを除いてもなお意味があるかどうかを自由に判断してください。気を悪くなどはしていません。「物の道理をよくよく考え」というところに至って、もの思いに沈みそうになったのです。もとの詩では、

細思物理坐歎息（細やかに物の理を思そぞろって坐たんそくに歎息する）

「物の理」とは真理のことです。真理というからには千年くらいの時間が経っても変わらないはずです。そのような「物の理」を人は手にできたのでしょうか。たとえ石鼓に匹敵する寿命を得ても、人は「物の理」に到達できないのではないのでしょうか。いまそのように思いかけていたのです。

——えーと、「物の理」ってなんなんだろうね。フィジックスの「物理」なら、たぶん千年経っても変わらないものを人類は獲得したんだろうけど。

㊦ 「物理」においては後退することのない前進を遂げながら、「物の理」においてはそののではないのはどうしてなのでしょう。求めるべきものが何であるかも

わかっていませんし、求めるべきものが存在しているかどうかもわかっていません。石鼓は「物の理」を示唆してくれていながらも、私はそこに接近できずにいたのです。

八観の第二は、開元寺かいげんの地下から出土した碑です。唐の玄宗皇帝の命令で全国各地に開元寺という名の仏教寺院が建てられ、鳳翔の開元寺は特によく知られていました。詩は歴史上のごく古い事件に関係する内容で、あなたの興味をひききそうにないので省きます。

第三は、同じく開元寺にあった唐の時代の画です。唐の時代の画の作者として非常に有名なのは、閻立本えんりつぽん、呉道玄ごどうげん、王維おういなどでした。いまの日本の人はヨーロッパのミケランジェロとかルーベンスとかの名ならよくご存知でしょうけれど、中国の古い絵画にも目を向けていただきたいと思います。開元寺には呉道玄と王

維の画がありました。私はかねてから画に関心があり、都にきて名品といわれるものを実際に見る機会を得て強い刺激を受け、開元寺で2人の画を見てから自分でも描くことを始めてみました。今後、画についてしばしばお話することになると思いますので、話の順序として、都で閻立本の画を見たことを先に申し上げておきたいと思います。

閻立本が描いた水神の画が都の浄因寺じょういんにありました。大変に貴重な画で、当時もしも「なんでも探偵団」のようなものがあつたら、鑑定の結果、何百万円とか何千万円とかの値がついたかもしれませぬ。そんな画を、お寺の大覚璉師だいがくれんしという僧が父にほんとプレゼントしてくれたのです。

閻立本は唐以前から続く貴族の出身で、一族は宮廷の装飾を家の技としていました。閻立本は装飾家としてではなく、儒学を修めて政治家として国家のために

役立ちたいとの志を抱き、唐の二代皇帝に仕えて宰相にまでなりました。唐の二代皇帝とは太宗皇帝たいそうで、唐の基礎を築いた名君として知られています。その一方で、やはり一族の伝統によるのでしよう、閻立本は画にも優れ、本人としてはあくまでも余技であったのですが、かえってそちらの方で世の称賛を得たのでした。父は大覚璉師から閻立本の画を頂戴すると、金品をもってお返しができるようなものではなくともないので、お礼として詩を書き、私にも作るよう命じました。

自然の理に通じた人は画を学ばずとも、

天性のままに絵筆を用いることができるのだろう。

泳ぎの上手な人は、水というものをよく知っているので、

初めて船を漕いでも巧みに操れるという。

閻立本は元来は儒者で、文章の妙に通じた先人を慕い、画はたまたま戯れに始めただけだった。

好んでやめられなくなり、

筆の勢いは翻る風のようになった。

唐の太宗皇帝はあるとき池に舟を浮かべて遊び、

珍しい水鳥が水に戯れるのを見て、

一人に詩を作らせ、閻立本に画を作らせた。

閻立本は家に帰ると、子に向かって言った。

「私は学問をした人間でありながら、

今日は画によって天子のお召しを受けた。

おまえたちは決して私のように画を習ってはいけない」

時に太宗皇帝は四方の平定を成し遂げ、

南の国からは白い雉が、西の国からは青い蓮が献上された。

そのときのありさまを閻立本は水神の集まりになぞらえて描いた。

竜にまたがって天に昇ろうとする神が皇帝、

大亀の背に乗って左右に従うのが大臣、

熊や豹のような面々は異国から使者だ。

唐の太宗皇帝の功績はまさしく神のようであって、

後世に並ぶ者がなかった。

その唐朝にも亡ぶときがきて、

あまたの盗賊が国土を偷み合い、

都は三日間の猛火に包まれ、皇室の至宝は煙と消えた。

天の神には天官、地官、水官がいて、

閻立本の画は水官を描いたものであり、

しかも神のわざによるといっていいものであったから、

天もこれを焼かせてはなるまいとしたのだろう、

火より脱出させ、東に出て、いま宋の都にきたのだった。

都の貴人はこの画をほしがり、

あの手この手で大覚璉師に話をもちかけた。

高僧は一切心を動かすことなく、

我が父が頂戴することになった。

あまたの宝物を積んだところで高僧のお心になうべくもないので、

父は一篇の詩をもって返礼とし、

画の前に清らかな紙片を置かせていただくのだ。

——でもどうしてそんな画がプレゼントされたの？ タダだったんだよね。

㊦ 我が父は、思いもよらぬ好意を寄せられるということがよくありました。まったくもって不思議な人です。お礼が詩だけであるところが、高僧と父の心の交流のあり方を物語っているように思います。

——いまの詩の最初に、「自然の理に通じた人は画を学ばずとも」とあったのは、もしかしたら、何でも独学だったというお父さんのことが念頭にあったの？ 深読みかなあ。

㊦ 自然の理は一つで、万物をあまねく貫いているので、泳ぎのような側面からであっても、自然の理を会得したならば、すべてに通じうるという考え方は父に限らず、かなり一般的でありました。さきほど言った「物の理」とは、ひとつの定義の仕方として、自然の理が人間界においてどのように発現するかの際序ということになるでしょうか。

では、鳳翔八観の第三の詩です。

呉道玄の画が鳳翔のどこにあるかと尋ねると、

普門寺ふもんと開元寺だとの答えが返ってきた。

開元寺の東塔には王維の画もあると言う。

画において呉道玄と王維に優る者はいないと常々考えていた私は、
それで開元寺を訪れた。

まず呉道玄の画を見たところ、

雄々しくも奔放で、海の波が翻るかのようだった。

呉道玄が手を下すと、

筆がまだ到る前から、風雨が迫り、その勢いに万物が吞まれてしまうのだ。

呉道玄が描いたのは、

高く林が繁るなかへと朝日がさしこみ、

釈迦がまさに涅槃ねはんに入ろうとしている場面。

菩薩たちは泣き、

衆人は手をこまねき、

千万の異界の者が悲嘆にくれている。

次に王維の画を見たところ、

その人の詩が気品ある香りをただよわせるのと同じく、

清らかで、のびやかであった。

画かれた釈迦の十人の弟子は、みな鶴のように痩せ、

そこに宿る心は火の消えた灰のように静まり返っている。

ふた群れの竹があり、

雪から現れ出たかのような根や節と、

乱れ動く無数の葉が描かれていて、

その葉のすべてに葉の本質を見とることができぬ。

呉道玄の作品は絶妙で、

画に巧みであるという観点からその画を論じることができらるだろう。

王維の作品は形の外から得た画で、

仙界の鳥が自由に飛びまわるかのようなようだ。

二人ともに神技であるのだが、

王維に関しては画を論じるのをやめて、

口を閉ざすしかない。

——ということとは、王維の画の方が上だって思ったの？ どんな画なのか見ては
いないけど、トーバー君の詩から二つの画の違いがなんか想像できるような気が
する。そんなふうに言ったら、トーバー君の詩をほめ過ぎたってことになるかな。



後に別の画を見て呉道玄こそが唐代一であると思ったりもしていますので、一概にどちらが上かということとは言えません。このときは王維が「葉の本質」と捉えていると私なりに発見して、王維は非常に優れていると思つたのでした。

「葉の本質」と詠んだのは、原詩では、

一一皆可尋其源いちいち（一一皆其の源そを尋ねるべしみなもと）

「源」とは、葉が葉であることの淵源、何がそれを葉にさせているかということ。これも自然の理です。ギリシア哲学でいうとアイデアに相当するでしょうか。王維の画を見て、全ての葉にその「源」が描き込まれていると感じて感動したのです。

王維は、先ほど「王子孟韋柳」として挙げた1人です。自然を詠んだ詩において

おうもう いりゆう

唐の時代を通じて最も優れるというのがゆるぎない評価であろうと思います。いろいろと脇道にそれますが、王維の詩を一つだけ聞いていただきましょうか。

谷のほとりで鐘の音が長く響き、

あたりから漁師や木こりの姿が次第に消え、

遠くの山が輪郭だけを残して暮れる。

そのなかを、

まだ白く残る雲に向かって私は帰りつつある。

ひし
菱の蔓は弱くて行方を定められず、

やなぎ
楊の花は軽くて飛び散りやすい。

東の水辺の春のそのようなありさまに心を痛め、

山の住いの門をためらいがちに私は閉ざす。

——えーと、こういう詩を聞くと、ボクとしては、例によってジョン・クレアの詩を持ち出したくなるんだけど。始まりはいまの詩と状況が似ているんだ。

ちようどタベの鐘が鳴ったとき 私たちは出かけた。

野原や牧草地をぶらぶらと散歩するために。

(森松健介訳、24ページ)

でも、最後はまるで違う。

それから私たちはもう一度我が小屋へとご帰還の歩を進め、

夜露を閉め出して、ドアには鍵をかけた。

犬は私たちの姿をみつけて大喜びの吠え声、

我が家の上に棲む梟が飛び、ホーホーと「お休み」を告げた。

ジョン・クレアは夕方の散歩に満足して楽しい心持ちでこの詩を終わるんだ。ジョン・クレアも、このような詩を詠んだと思うとちよつとほつとするよね。

王維の方は水辺の菱や楊を見て心に愁いを抱いたんだよね。それはどうしてだったのかなあ。

ⓧ よるべない思いの象徴だとの解説は不要でしょう。言葉で説明し得ないものを言葉で伝えようとするのが詩なのですから、心の奥にあったものは分析して理解するのではなく、詩を通じて想像していただければいいと思います。

王維は杜甫よりも少し先輩で、杜甫とは対照的な青年時代を送りました。十代の半ばに都に出て、たちまち貴族の間で評判をとり、社交界の寵児となりました。なよつとしたたずまい、詩に優れ、音楽に優れ、一度見たら誰もが放っておけなくなったのです。いわばアイドルです。必死に自分を売り込んでもいい反応のなかった杜甫と大きく異なります。科挙にも楽々合格して、申し分のないデビューを遂げたわけですが、王維は貴族にもてはやされることを自ら望んだのではなく、天下のために我が才能を使おうとして貴族社会と衝突し、二度の挫折を味わいました。それを乗り越え、ようやく都で要職に就いたところで、安祿山の反乱

が勃発し、杜甫や韋応物と同じく反乱軍が占拠した都に取り残されました。杜甫はほぼ無名でしたが、王維は著名人であったのが大きな不幸のもとになりました。安祿山は、王維を自分のもとに召し抱えれば天下の受けもいいと考え、大臣のポストに無理やり就けさせたのでした。王維は安祿山のために実質的な働きは何もしていませんでしたが、唐王朝が都を回復させると、反乱に加担した罪を問われました。あわや死刑になるところを、弟たちの命懸けの嘆願で罪を軽くされました。王維は精神的に深い傷を負い、それ以降は自分の別荘にこもって仏教に救いを求める孤独な日々を送ったのでした。先ほどの詩は安祿山の反乱以前のものでありますけれど、晩年の孤独を予感させるものがあるといえるでしょうか。

——ジョン・クレアも晩年はめちやくちや孤独だったけどね。それで、よるべな

い思いの象徴にひっかけて、酔った勢いで言うと、ボクってどうなんだろう。晩年の孤独を予感させるようなものがあったりするのかなあ。きつとろくでもないことになっているだろうなあって、そんなふうにしか思えないんだよなあ。この前、夕方に自転車であらうとしたときに、ふと、詩みたいなのが浮かんできたんだ。そいつを聞いてもらってもいいかなあ？

㊦ ほう、あなたが詩ですか。どうぞ、どうぞ。

——詩かどうかはわかんない。超有名人のトニーバー君の前で自分の作品を披露するなんて大胆すぎるよね。

そんなもんだと、安直に言ったらアホくさいじゃんって、
そんなのわかってるさ。

だけどほかに落としどころが見つかんねえんだよ。

落としどころなんていらねえやって、開き直ってみせてもいいけど、
だったら全部がいらねえじゃんってことになっちゃうかもな。

つまり、アイツはアレチウリという、

ちよっとばかし、いや、かなりタチのよくねえ草なんだよ。

もとはどっか遠くに国からきて、

川べりとかの、なんかぱっとしない土地で芽を出し、

すばやく伸びてほかの草の上へのしあがり、

タテにもヨコにも広がって、

自分の葉っぱの下にみんなをおさめてしまおうとするヤツなんだ。

フェンスがあればツルをからめてずんずんのぼり、

電柱があればやっぱりずんずんのぼり、

あわよくば天にまで届こうとする。

あれは不法係留ってことなんだろう、

ワイヤーを渡して両岸を結び、

そいつに船がつかながれていて、川のなかほどでゆらゆらしている。

アイツはそのワイヤーを見つけ、

向こう岸に渡ってやろうともくろんだ。

アイツとしては自然の欲求だった。

ツルでワイヤーをつかみ、ぐいと体を伸ばし、葉を繁らせた。

またぐいと伸ばし、葉を繁らせ、対岸制覇へと奮い立った。

夏がずっと続いてくれたら、アイツのためにはよかったのだろう。

朝の露が冷たくなって葉が縮み、

秋の風が吹くようになってツルが伸びを止めたのは、

残りが川幅の半分の半分くらいになったころだった。

もう少し早くにワイヤーをつかまえていれば、

一日にせめて一センチでもより長く伸ばしていたらと、

アイツが後悔したかどうかは知らない。

こんなありさまを見たら、

落としたところは、そんなもんだとなるしかねえって、

わかってくれるよな。

いつだって遅くはない、

払った努力は報われるみたいなのを言ってくれたりするけど、

いまのアイツには屁のつっぱりにもならねえんだよな。

そもそも、アイツはタチの悪い外来種、ワイヤーはあってはならないものだ。

だけど、アイツはここで生きちまったんだぜ。

ハナからいらねえアレチウリには、

平凡な落しどころさえないってことなんだよ。

㊦ あなたが否定したばかりの「いつだって遅くはない」の常套句を使いたくありません。これを機会に詩を始めてみてはいかがでしょうか。あなたの晩年がどうであるかはもちろんわかりませんが、いつもの日常を少しばかり豊かにしてく

れるのではなからうと思えます。

——励ましのお言葉はありがたく受け止めておくけど、自分のうますぎる詩に酔いしれるよりは、誰かのへぼな詩にむかつた方がよっぽど有意義な気がするから、たぶんあんまし作らないと思うよ。酔いしれた後の二日酔いが何よりもこわいしね。

① 王維の画についても少しお話しておきましょう。ずっと後に、このような短い文章を記したことがあります。

王維の詩を味わうと、詩のなかに画があるかのようで、王維の画を見ると、画の

なかに詩があるかのようだ。詩と画はひとつで、私が見た王維の画には次のような詩が書き添えてあった。

谷川に白い岩があらわになり、

寒空のもとに紅葉は稀だ。

山のこの道に雨は降っていない。

それでも衣がしっとり湿るのは、

山の青さの潤いによるのだ。

詩と画は一体であるという考えを私はここから展開し、自身でもその実践を目指すようになりました。蛇足ですけれど、ある人に、王維のこの画はどこにある

のですかと聞かれて、「長安を包んだ3日間の猛火によって煙となったのでしょう」と答えたのでした。

——はあ？ ってことは、科挙の答案と同じ手口ですか？ トーバー君って、常習犯なんだね。

㊦ 次に行きましょう。鳳翔八観の第四は、天柱寺にあつた維摩詰ゆいまきつの塑像です。

唐の時代の楊惠之ようけいしという僧が彫つたものです。維摩詰は釈迦の弟子で、出家せず俗人としての暮らしを続けたままで仏教の奥義に達し、俗世に生きる人間にとつての手本となった人です。その維摩詰があるとき病気になり、見舞いにきた文殊菩薩もんじゅぼさつと問答したという話があり、天柱寺の像はその折の姿を表わしたもので

した。

莊子そうじによると、子祀しき、子輿しよ、子犁しり、子来しらいの四人は、

「頭が無むで、背が生せいで、尻が死せいという者がいたら友だちになりたいたいものだ」と、いつも笑って言い合っていた。

あるとき子輿が病氣になり、子祀が見舞いに行くと、

子輿はひよろひよろと歩み出てきて、水辺に立って自分の姿を映し見た。

子輿の肩は頭のとっぺんよりも上にそびえあがり、

背中は大きく湾曲し、顎は臍の下に隠れていた。

そのありさまはかつて笑い合っていたものに近かった。

子輿は言った。

「造物者は私をどうしたいのだろうか」

子祀は言った。

「君をそんなふうにした造物者を憎んでいるのかい」

「自分の体がもっと変わったところでそれはそれまでのこと。

どうして天を憎んだりしようか」

楊恵之の維摩詰像は、

亀のごつごつとした骨格をからからに干したかのように、

あたかも子輿を思わせる奇怪さだ。

子輿も維摩詰も、道の奥深くに達した至人^{しじん}は、

自分の体の変化など浮雲が移り行くのと同じと見て、

生とか死とかの境界を超えたところにいる。

世の中には、堂々した身体を備え、

病ということではないのに、

心を疲れさせてしまっている者が少なくない。

維摩詰は精神が完全な状態にあって、

千人の猛者がかかってきても笑いながら退けた。

ある人が、いかなる法をもってそうであるのかと尋ねると、

維摩詰は首を垂れたまま言葉を発しなかった。

問うた人は心の内で了解した。

そのときと変わらずに、維摩詰の像はいま言葉を発しない。

村の爺さん婆さんはこんな古びた像には目をくれず、

野鼠が髭をかじったりもする。

本来なら、この像の前で大悟するはずであるのに、
無言の師弟となろうとする者はいないのである。

——彫った像が何も語らないのは、生きていたときと変わらないっていうのは、
ちよつとおもしろいと思っただけど、無言でホントに通じたりするんだろうか？
やたらと言葉を並べるトバー君は、無言の師弟になれないだろうなあっていう
のはわかるけど。

㊦ 先ほども言いましたように、言葉では伝え難いものがあつて、それが詩を生
んだり画を生んだりしたということもあるのではないでしょうか。究極的に、最
も大切なことは無言によってのみ伝えられるという考え方があり、莊子はしばし

ばそのテーマを取り上げています。

—— 莊子っていうのは道教の親玉だね。釈迦の弟子の像を詠んだ詩なのに、最初に莊子の話を持ち出したのは、ちよっとヘンじゃない？ 奇怪な姿からの連想ってこと？

ⓧ それもありますが、私は仏教を理解する過程で、道教の助けをたくさん借りました。この詩などは、仏教についてほとんど何もわかっていなかったころのもので、子輿からの類推で維摩詰に接近しようとしたのです。

私は道教の寺院で最初の教育を受け、道教の経典を繰り返し朗唱し、子どもであった私は十分な理解はできないものの、精神形成の奥深いところで道教の影響

を受けました。現実の政治に関わろうとする学問である儒学と、人間の精神の救済を目指す宗教である仏教とは隔たりが大きく、儒学的トレーニングを積んだ脳で仏教を理解するのは容易ではなく、道教的思惟が間をつなぐ架け橋になってくれたのです。

そもそも仏教が中国に入ってきたときに、サンスクリット語で記された新しい概念をどのようにして中国語に移すかで先人たちは苦勞し、道教の概念をさかんに援用しました。典型的なのが空くうと無むです。空くう、サンスクリット語でいうとシューニヤは、仏教で最も重要かつ難解な概念です。先人たちはそれを道教の無むの概念を下敷きとして理解しようとしてきました。道教の無むは、有ゆうに対する無むで、有ゆうよりも無むに重きを置きました。仏教の空くうは、有ゆうと無むの相対性を超えた無むなので、道教の無むとは異なるのですが、まずは道教の無むを足場に仏教の空くうに接近しようとした

のです。つまり、中国人が歴史的に仏教を理解してきた過程と似たような経緯をたどって、私自身も仏教を理解しようとしたといえるでしょうか。

——そういうのって、「個体発生は系統発生を繰り返す」っていうことかな。

㊦ あなたもかなり理系っぽいではありませんか。

——生物は一応勉強したからね。だけど、「個体発生は系統発生を繰り返す」っていう説は科学的にはあやしいらしいね。「個人の精神史は人類の精神史を繰り返す」って言ったたら、もっとあやしいんだろうなあ。だって、21世紀のいまに至っても古代ギリシアあたりで止まっちゃっているような人も多いみたいだからね。だ

つてさ、この間、ウィキペディアで「デマゴグ」の項目を見たら、「デマゴグは普通、国家的危機に際し慎重な考えや行いに反対し、代わりに至急かつ暴力的な対応を提唱し穏健派や思慮を求める政敵を弱腰と非難する」って書いてあったんだよ。いまだこの国でもそんな人ばっかいるじゃん。笑っちゃうよ。

① 鳳翔八観の五番目は湖です。鳳翔の町の東に、そのままの名の東湖とうこがあります。湖といってもあまり大きなものではなく、上野公園の不忍池しのはずのいけとか井の頭公園の井の頭池いんのこうちくらいでしょうか。その昔、鳳ほうという鳥がここにきて水を飲んだことから飲鳳池いんほうちと呼ばれていたこともあり、それより鳳翔という地名が起ったとされています。鳳は、地上に聖天子が現れると、飛んできてその御代を言祝ことほぐとされる想像上の鳥です。

私は蜀江しよくこうのほとりに生まれ、

清らかな川は藍よりも青く澄んでいた。

いま塵で濁ったこの世間を走りまわって、

耐えられない思いになることもある。

岐山きざんのふもとのここの風光ときたらどうだろうか。

山はあっても赤く禿げあがり、

川はあっても白いとぎ汁のようだ。

たまたま町の東に足をのばし、

ふと門をくぐってみたところ、

その先が何やら奥ゆかしい雰囲気に包まれていて、

小さな湖があった。

この水だけは澄んで故郷を想わせ、うっとり夢見心地になった。

水の源は山の高いところにあり、

波を立てて走り、地をひたして走り、

東の丘にぶつかって、

ことごとくこの湖に呑み込まれるのである。

そのありさまは、青い竜が山に寝そべって、

清く甘い水を湖に吐き出していると見ることもできようか。

いずれここに蓮の花が開く季節になったら、

夕べの涼を求めて舟を出し、

ざわざわと蓮の葉を分けて湖の中心へと入ってみようか。

葉が風に翻り、遠くも近くもわからず、

世間とのつながりをすっかり忘れて、

ゆったり息つくことができるだろうか。

たちまち晴れて、たちまち雨が降り、

水の深いところには魚や亀、

水の浅いところには巻貝や二枚貝、

それこそようよふ浮いたり沈んだり、

餌をやるまでもなく、糸を垂らすまでもなく、

すぐさま籠がいっぱいになるまで採れるであろうか。

聞くところでは、昔むかし周の世が始まったときに、

青い鳳が岐山に棲みつき、この池に飛んできて水を飲み、

いろどり豊かな己の姿を湖面に映したという。

鳳が好む梧桐があおざりいまもここにあり、

樹の太さは一千年の齡よわいがあるかのようなようだ。

いまは鳳の姿はなく、鷹やら鶉やらを見るだけだ。

私は遅く生まれ過ぎたのか。

鳳について記した古いにしえの書物は時の彼方にぼんやりとかすんでしまった。

それでも、私は古意を好んでここに遊び、

鳳の詩を古の人のように詠んでみたいと思う。

ここ鳳翔は長安を守る三つの町の一つだった。

湖のほとりで飲んで、酔って歴史を談じてみようか。

鳳はおそらくこのところの王朝の興亡などには関心がないだろう。

もとの門にもどると、

道行く人はここで馬を止めることなくひたすら通り過ぎて行く。

どのような用事に追われて、

湖に目を向けようともしないのだろうか。

私がいまここでこうしていられるのは、

幸いにも知事がおおらかに見てくださるからだ。

ならば、一日に二度ずつここにきて、

そのまま三年の任期を満了してしまおうか。

暮れ方の鐘や太鼓の響きを聞きながら、

連日、千鳥足で町へと帰って行くのだ。

——ん、これはどういう詩？　なんか、よくわからないですう。赴任したばかりで、もうやる気をなくして、湖のあたりで酔っ払っていようか、それとも、山に籠って世捨て人になりたいっていう思いがまたぞろ出てきたってこと？　鳳が湖で水を飲んだよき時代から遠く離れて、いまの世は希望がないってことが言いたいのか？　詩の主題がわかりませーん。

㊦　湖のほとりでのさまざまな思いを一つの詩に盛り込んだので、いまとなっては自分でもわかりにくくなってしまったというかもしれません。

鳳翔八観の第六は真興寺しんきゅうの高閣です。町のなかにあつて、高さが十余丈、他から抜きん出て高い建築物でした。

真興寺の高閣に登る。

遠くの山や川も、近くの町並みも、

ぼんやりとしたひとつの形に溶け込み、

上を飛ぶ鳥の声も、下を行く人の声も、

ほのかなひとつの響きに溶け込んでいる。

ここの高さはどれほどあるのか。

背を伸ばして落ちる日を見送った後で、

手を伸ばして流れ星をすくい取れるだろうか。

この閣は誰が作ったのか。

南の山から木を切り出し、

すっかり赤禿山にしてしまったのが王彦超だ。
おうげんちよう

王彦超の往時の姿を写し取った画がこの閣にある。

黒い鉄のような顔面、

切れ上がった眼差し、

身の丈はさながらこの高閣と競うかのようにであった。

昔の人は横暴をほしいままにし、

今の人を驚かせる大きな事業を成し遂げた。

この閣は昇るだけでも息が切れて苦しいのに、

建設に携わった人々の労苦はさぞや耐え難かったであろう。

さあ、この高閣を見るがいい。

作った人は果たして勇者にして英邁であったのか。

——ん？ これも、なんか、よくわからないですう。トーパー君の評価はどっちなの？ これを造ったのは、民衆を苦しめた横暴な悪いヤツなの？ 大事業を成し遂げた勇者なの？ この前、風光豊かな池を掘った人のことはかなり批判していたよね。ここではなんかあいまいなのは どうして？

いっけねえ、今日はしゃべらないって最初に宣言したのに、ボクっていままで以上に口をはさんでいるよね。詩の大家のトーパー君の作品を批判なんかしちやっつて、ひどいもんだよね。

㊦ 王彦超の評価はどの面を見るかで変わります。「鳳翔は長安を守る二つの町の一つ」と前の詩で詠んだように、鳳翔は軍事的に重要な都市でした。唐王朝が衰えてきたときに、軍閥の親玉が鳳翔に居座り、武力を背景に朝廷を操ろうとし

ました。長安が戦火で灰塵に帰すと、鳳翔がこのあたりの中心都市となり、ここを拠点とした軍閥が天下の帰趨に大きな影響を与え続けました。宋が天下を統一するに当たって、鳳翔をいかにして体制に組み込むかというのが大きな課題となりました。それを成し遂げたのが王彦超でした。大きな建造物を建てるために、民衆を苦しめ、自然を破壊したのは非難されて仕方のないことではあっても、真興寺の高閣は鳳翔八観の一つに数えられるような文化遺産となったので、王彦超の評価はあいまいとならざるをえなかったのです。

鳳翔八観の第七は李茂貞りもていが作った庭園です。李茂貞は、王彦超より少し前に、鳳翔で威を張った軍閥の親玉です。

朝のうちに馬にまたがって町の北へと行く。

東に向きを転じると、

青々とした竹が高く伸び上がり、

その下に赤い門があつて、

壊れかけた塀に囲まれた古い家があつた。

鞭を挙げて扉を軽く叩くと、

静かな音が谷間にこだまする。

馬より降り、門から十歩ばかり進む間に、

早くも九回は目を向けて見るべきものがある。

いろいろな花が四方に咲き乱れ、

百種の鳥がさえずり合っている。

谷の水が西から引かれ、塀際を音を立てて巡り、東の林へと入って行く。

その奥に緑に包まれた窓が見える。

竹と水は清らかさを競うかのようで、

その間に一羽の鷺が立っている。

ひとかかえ百尺もあろうかという松の巨木があり、

その幹に歳久しく経た青い鱗が縮こまっている。

これほどの松はこのあたりに珍しく、

長安周辺でこれ一本であるのかもしれない。

橋を渡って流れの南に行くと、

道の左右に高い木が多くあり、

日の光が淡くさえぎられ、

凍りんとした空気が蓄えられている。

東の四角い池で、野生の鳥と飼われている鳥とが入り混じっている。

私は問いかける。

「この庭園は誰が築いたのですか」

「その昔、李將軍が世の衰えに乗じてこの地で威を張り、

民衆からさまざまに口実で税を徴収し、

一杯の粥、一杯の汁だけが課税を免れ、

耕作地を取り上げてこの庭園を築いたのです。

生業を失った人々は、

李將軍が怖くて泣くことさえできませんでした。

いまでは鳳翔に名高いこの大庭園でも、

このために破滅した家は千を数えました。

勇^{ゆう}壯^{じゆう}を誇^こった李將軍の戰^{せん}衣^いには虱^{しつ}がわき、

ここで飲^のんだ美酒はむなしく消^{しょう}え、

李將軍は我々からその名を呼び捨てにされ、

冷笑されるだけとなったのです」

この地^ちにきた私は、李將軍と違^{ちが}い、吹^ふけば飛^とぶような小役人^{せうやくにん}だ。

それが李將軍の庭^{てい}でぶらぶらと遊^{あそ}んでいられるのだから、

人生^{じんせい}というものはどうなるかわからない。

李將軍のような力^{ちから}などはないこの私^{わたし}でも、

後世^{こうせい}の人^{ひと}から笑^{わら}われるという点^{てん}においては、

李將軍と同じ^{おななじ}ということになってしまいかねない。

ともあれ、今日^{けふ}のところはこの風光^{ふうこう}を楽し^{たの}むのでよしとしよう。

——余計な感想はもう言わないよ。だから、どの詩もなんか同じような感じに聞こえる気がするの、勘違いかなあみたいなの、口の悪いことは決して言わないからね。ほら、断じて黙っているよね。

㊦ 八観の最後は古い時代の人を祀った墓です。

町の東の一角にちょっとした滝があり、

そのかたわらに千五百年前の秦の穆公ぼくこうのだとされる小さな墓がある。

当時はここに町はなく、

昔の人は滝を目印に墓を訪れたのだろう。

穆公が死んだ後で、特に優れた三人の重臣が殉死した。

人々は三人を失って深く悲しみ、それから国は病み疲れてしまった。

だから、穆公は後始末をきちんとしておかなかった愚かな君主だったと、歴史家からは批判されたのだ。

だが穆公はかつて敗軍の将を罰しなかった。

戦に敗れたのは、自分が欲深く領土の拡大を求めたからで、

將軍のせいではないとして、

その才能を惜しんで起用し続けた。

そのことを思えば、

有用な人物を冥途の旅の道連れにするようなことを、

穆公は望んだりしただろうか。

三人はそれぞれの気持ちから殉死したので、誰も止められなかったのだろう。

昔々の人々は、たった一回の食事の恩でも、意気を感じるに己の身を殺すことも厭わなかった。

いまはむろんそのような人を見ない。

いま見ないから、昔もいなかったはずだと、疑ってはいけない。

遠い昔の人には会うことができない。

だから、いまの人は古の人の心が理解できない。

そのことを私はただ傷むばかりである。

——これは、けんさん峴山けんさんっていったっけ、山の上での思いと通じているんだよね。

㊦ こうして鳳翔八観の詩はできあがり、私はほかには格別の仕事もしないうちに、早くも大晦日となりました。

年越しの大事な行事として駆儼くいなというのがありました。いまも日本で行われている節分の豆まきの原形で、新しい年を迎える前に悪さをする鬼をやっつけておこうという鬼やらいです。鳳翔ではどのように鬼やらいをするのかと、そのときがくるのを待っていますと、都からの通信が役所に届き、そのなかに弟からの手紙が入っていました。見ると、ちょうど年越しの時節に合わせた詩が添えてありましたので、いまの心情をその返しかへしの詩に詠み込もうと思案し始めると、役所の年老いた小間使いがぬっと入ってきて、耳元で「鬼やらいをやんべえか」とやたらと大きな声を出しました。びっくりして見ると、悪鬼と闘うためなのでしょう、

身にもろもろのものをまとい、手にもろもろの道具を携え、何とも形容しがたい格好に、詠みかけていた詩を忘れてしまいそうになりました。

しがない役人としての仕事が私を西へと駆り立てたとき、君と遠く別れるのがさまで惜しまれたわけではなかった。

いまになって、この次に会えるのが遠いことが憂わしくてならず、一年が終わり行くのを惜しむ心のゆとりはない。

酒を酌んで強いて楽しもうとしても、

このあたりのご馳走は羊のスープに熊の干し肉とかで、

飲んでも食べても、気分は冷や冷やとしたままだ。

子どものころの年越しがしきりに思い出される。

指折り数えると、すでにとっくの昔だ。

行ってしまったことは、放った矢と同じ、

いまさら追いかけるものではない。

あれから得たものは、あれから失ったものを償ってくれない。

時の推移に感じ、事の変化を嘆くばかりだ。

そんなことを思っていたら、

役場の年老いた小間使いがやってきて、

「鬼やらいをやんべえよ」と言い、

そのかてしやく豊饒としたありさまに驚かされた。

もしかして、いまのこの愁いが鬼の仕業であるのなら、

ひとつここは小間使いを煩わして、

厄払いをしてもらうのがいいのだろう。

寒く凍てつくいまに、

梅や杏の枝を手にとってみると、

小さな幼い芽は麦粒くらいしかなく、

花はいつ開くとも知れない。

華やかな春の到来が遅いと嘆いてはいけない。

春の次には夏がきて、幼いころは過去となって、

花の終わった後にはもはや顧みられなくなってしまっただろう。

人生はただ楽しむべきだと、古の人いにしよが言った。

名声などどうでもよいではないか、とも言った。

どうして私はこうも多くのことを感じ、

身を焦がさなければならぬのか。

油が、油であるが故に我が身を炙あぶらなければならぬのと同じなのだろうか。

君の詩がきて、

遠くから私の心を言い当ててくれ、

胸の内をゆるやかにしてくれた。

まざまざと君の顔を見るような気がして、

すぐそこに君がきているのではないかと疑われた。

兄はちっぼけな役人になったばかりだが、

かたじけなくも知事をお手伝いする仕事をいただいている。

知事のご厚意で官舎の北側に池を掘ることになり、

川から青い水を引いてくるつもりだ。

いずれはその池に臨んで酒を飲みつつ、

ゆったりと日を送るようなこともできるであろう。

君の詩に和して詠み始めてみたけれど、

私は詩の力が弱く、君の詩と競ったならば、

負けた罰として首をちょん切られてしまうことだろう。

君の詩は作られて十日でここに着いた。

これから一カ月に一篇の詩を寄せ合うのなら、

千里の距離など何でもなく、

憂愁を軽く擲なげってくれることだろう。

——一カ月に一篇の詩が行き来するっていうのは、当時としては早い方なのかな

あ。いまならLINEかなんかで日に何度でもやりとりができてしまうけどさ、
そうだと、こんなふうな詩が作られるってこともないんだよなあ。ちよこちよこ
っと思いついたことを書いて終わってしまったもんね。

それはそうとして、えーとですねえ、池を掘るって、どういうこと？ 自分の
楽しみを先にはいけないって、言ってたのにヘンじゃない？ また批判する
みたいで悪いけど、黙ってられないかも。

Ⓣ 厳しく指摘してくださり、さすがあなただと思います。地方官としての仕事を
始めたばかりで、早くも問題が露呈しつつあったのです。しかし、それ自覚す
るまでにはなお時間がかかったというあたりのことを、次回お話ししたいと思います
す。

* * *

「鳳翔八観」の連作のうち「石鼓歌」は若い蘇東坡の代表作としてどの選集にも収録されている。私もかつて読んだが、言葉が難しく、たくさん注をいちいち見て行くだけで疲れ切ってしまう、詩がおもしろいのかおもしろくないか、そんな単純な感想をもつことさえもできなかった。だから、「八観」のほかの詩まで読もうという気には毛頭なれなかった。

意外だったのは、デビューアルバムだと本人が自称する割には、それを語るトニー君の声に、誇らしげなところが一つもなかったことだ。声の調子までは文字に写せなかったもので、そのことはとくに注記しておきたい。

渋りがちでさえあった一つの理由は、次回に語られる内容に関連するのかもしれない。

れない。このデビューアルバムによつて、蘇東坡の詩は天下の耳目を集めることになったのだが、役人としての仕事はそれとは遠く乖離したものであつたということなのだろうか。

もう一つの理由は、「古意」への思いに関連するのではなからうか。「細やかに物の理を思う」ことについて、トーパー君はいま新たな思いを抱いているのではないかと推測してもあながち見当違いではないのではなからうか。

私が初めて「石鼓歌」を読んだのは、それこそ指を折って数えれば40年もの昔になる学生時代で、理想を大昔に求める古い中国人の思考法は、当時の私にはかなり愚かしく感じられた。ごく単純に言つて、周の文王の時代の政治が民主主義による政治に優るはずがないからだ。

その後、人類が置かれている状況に対する認識が大きく変わり、現在は過去に

優るとは決して言えなくなった。ジョン・クレアの時代以降の人類の思惟は、それ以前の思惟に実は及ばないのではないかと、疑わずにはいられないことが多々出てきた。トーパー君が見てきたと称している時間に比べたら、40年などはわずかなものだ。「物の理」というからには、千年を経ても変わるものではないだろう。人類文明が岐路に立っているいま、まさに「細やかに物の理を思つて坐るに歎息する」のは私たちであるのだろう。